月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.104



『閃の軌跡IV』から新キャラクターが参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

《輝く環》の顕現により
王国は……

英雄伝説
空の軌跡SC
～絆の在り処～

オルガ！
空から女の子が！

も～っと集まれ！
ファルコム学園

『軌跡』シリーズ15周年！
ナイアル&ドロシーの
迷コンビふたたび！

英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット2

ついに発売！
冒険がより
楽しくなる
DLCを大紹介！

イースIX
-Monstrum NOX-



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

序文

自分ではない何者かになる。
そんな夢を見たことがあるだろうか？

その夢の中で私は考える。
これは自分なのか、自分ではないのか。

夢が現実なのか、現実が夢なのか？
私が辿り着いた答えはひどく単純だ。

『どちらでもいいではないか』

どちらが真実なのか——ではない。
どちらも真実なのだ。

『バルドゥークの檻』本文より～



ついに発売！　冒険がより楽しくなるDLCをチェック！

好評発売中！

『イースIX -Monstrum NOX-』

『イース』シリーズ最新作『イースIX -Monstrum NOX-』がついに発売！　今号では発売日から配信開始されるDLCアイテムの数々を一挙紹介！　キャラクターたちが身につけることができる衣装やアタッチメントから、冒険で活躍する装備品、アイテムまでてんこ盛り！　なかには無料で配信しているものもあるので、ゲットしよう。

タイトル：イースIX -Monstrum NOX-　**発売日**：好評発売中
ジャンル：アクションRPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人
小売価格：[通常版] 7,800円(税抜) [数量限定コレクターズBOX] 9,800円(税抜)
[DL版] 7,600円(税込)
CERO レーティング：B

※画像は開発中のものです。



無料お試しセット 100円
HPを回復する保存食のセットです。

枝付レーズン×1／ホワイトナッツ×1／レッドチーズ×1／燻製肉×1

瓶入りポーションセット 300円
瓶入りのポーションのセットです。使用後も空き瓶が残り、持ち運べる回復薬の数が増えます。

フルポーション×1／ブーストポーション×1／エリクサー×1

保存食セット 150円
戦闘不能から蘇生できる、保存食のセットです。

黒イチジク×20／グリムナッツ×20／ノースブルー×20／熟成燻製肉×20

状態異常回復薬セット 100円
状態異常を回復する薬のセットです。

毒消し薬×10／鎮静薬×10／軟化薬×10／強壮薬×10／解呪薬×10／万能薬×10

呪薬セット(1)～(5) 各150円
ステータスを向上させる呪薬のセットです。

力の呪薬×1／守の呪薬×1／命の呪薬×1

秘薬セット(1)～(5) 各300円
レベルを上げることができる、特別な秘薬のセットです。使用したキャラクターのレベルを1上げる事ができます。(レベルの上限は99です)

修験者の秘薬×6

宵闇の欠片セット(1)～(5) 各300円
様々な素材と交換できる、宵闇の欠片のセットです。

宵闇の欠片×300

徳用食材セット 100円
料理を作るための食材セットです。

リンゴ×100／ジャガイモ×100／小麦粉×100／トマト×100／白アスパラ×100／マッシュルーム×100／チーズ×100／赤身の肉×100／白身の肉×100

上級アクセサリセット 300円
ゲーム終盤まで活躍する最上級アクセサリのセットです。

森羅の宝珠×1／クリムゾンファング×1

便利アクセサリセット 100円
料理を作るための食材セットです。

ラバーチョーカーIV×1／ブレイドリングIV×1／シールドピアスIV×1／戦士の刻印IV×1／クリスタルシールド×1／マスターバングル×1

スタートダッシュセット 100円
ゲーム序盤を楽にしてくれるお得なアイテムのセットです。

ヒールポーション×1／隠者の妙薬×1／10000ゴールド

10月4日 配信開始予定



ザ・モンストルム・ショー《赤の王》 350円

《赤の王》の服装を、オリジナル衣装『ザ・モンストルム・ショー』に変更できるようになります。



ザ・モンストルム・ショー《白猫》 350円

《白猫》の服装を、オリジナル衣装『ザ・モンストルム・ショー』に変更できるようになります。

はぐはぐアプリリス 100円



アプリリスの人形をパーティキャラの腕に装着できるDLC限定のアタッチアイテムです。

はぐはぐアプリリス×6

はぐはぐガッシュ 100円



ガッシュの人形をパーティキャラの腕に装着できるDLC限定のアタッチアイテムです。

はぐはぐガッシュ×6

はぐはぐ猛牛 100円



《猛牛》の人形をパーティキャラの腕に装着できるDLC限定のアタッチアイテムです。

はぐはぐ猛牛×6

アイウェアコレクション Vol.1 100円



アイウェアを装着できるDLC限定のアタッチアイテムです。デザインの異なるおしゃれなアイウェアを3種類まとめて購入できます。

丸眼鏡×6／おしゃれモノクル×6／オーバルサングラス×6

バラエティマスクセット 100円



マスクを装着できるDLC限定のアタッチアイテムです。デザインの異なるマスクを3種類まとめて購入できます。

カラスマスク×6／スカルマスク×6／拘束マスク×6

10月11日 配信開始予定

●ザ・モンストルム・ショー《鷹》：350円●はぐはぐモルビアン：100円●はぐはぐ白猫：100円●自己主張の激しいパネル：100円●アイウェアコレクションVol.2：100円●ユニーク仮面セット：100円●デリシャスウェポンセット：300円

10月18日 配信開始予定

●ザ・モンストルム・ショー《猛牛》：350円●ザ・モンストルム・ショー《背教者》：350円●無料お試しセット200円●ザ・モンストルム・ショー《人形》：350円

豪華景品が当たる WEB抽選会に参加しよう！

「イース IX-Monstrum NOX-」の発売を記念して、豪華景品が総計400名に当たるWEB抽選会が開催！　序盤をプレイするだけで正解が分かる簡単なクイズに答えるだけ！　忘れずに参加しよう！

応募期間：2019年9月26日 ～2019年10月22日

問題

アドルは水難事故が多いことを指摘されますが、どのような疑いをもたれているでしょうか？
黄色い空欄の中に入る言葉をお応えください。







A賞
キャストサイン色紙（18名）

アドル（梶裕貴）／白猫（小松未可子）／鷹（石川界人）／人形（鈴木愛奈）／背教者（下野紘）／猛牛（佐倉綾音）：各3名



B賞
スリムボトル（100名）

RED／BLACK：各50名 計100名（色はランダムとなります）

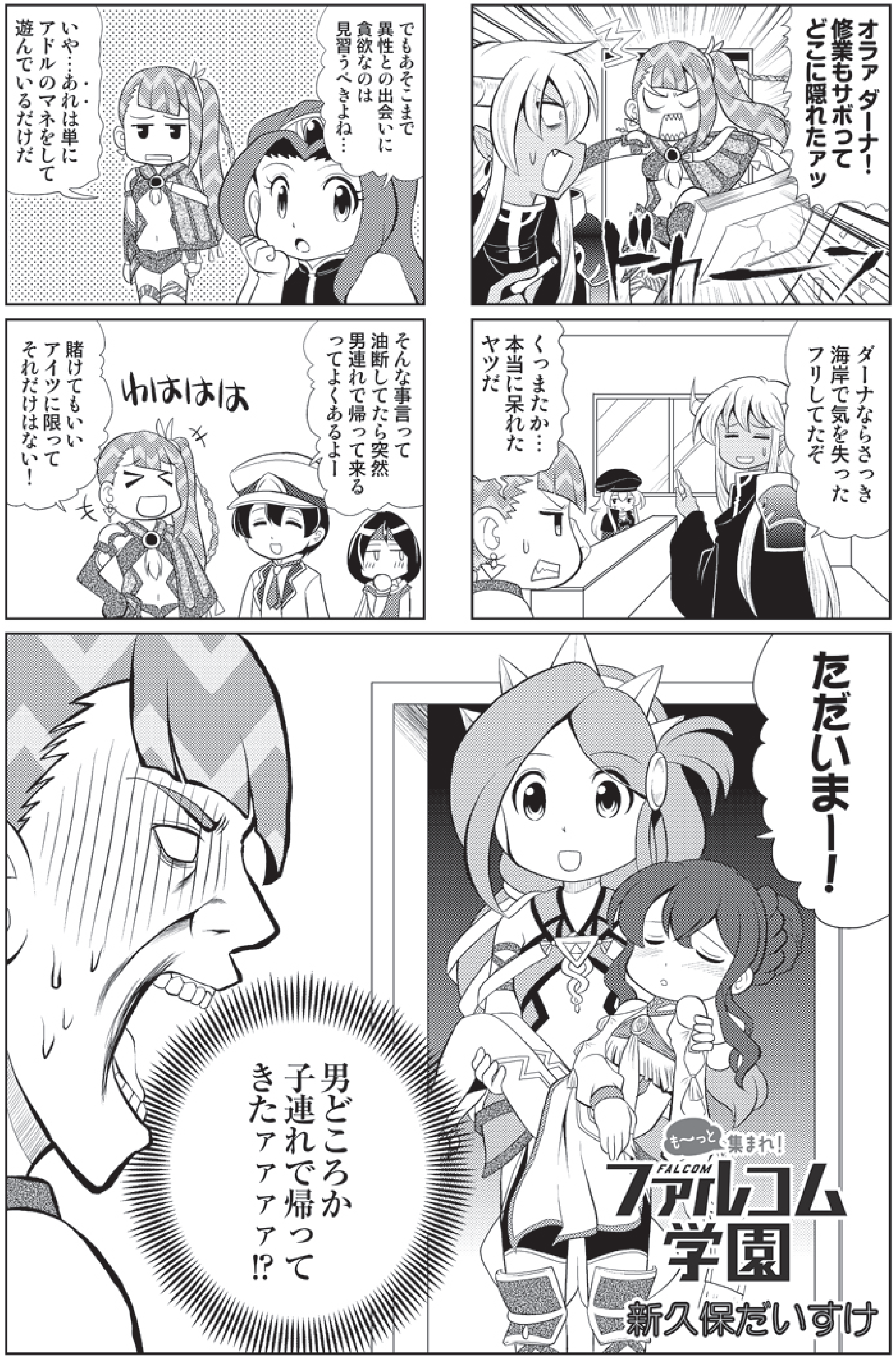


C賞
クリアファイル（282名）

■ WEB抽選会用ページ ■

https://www.falcom.co.jp/ys9/special/lottery/

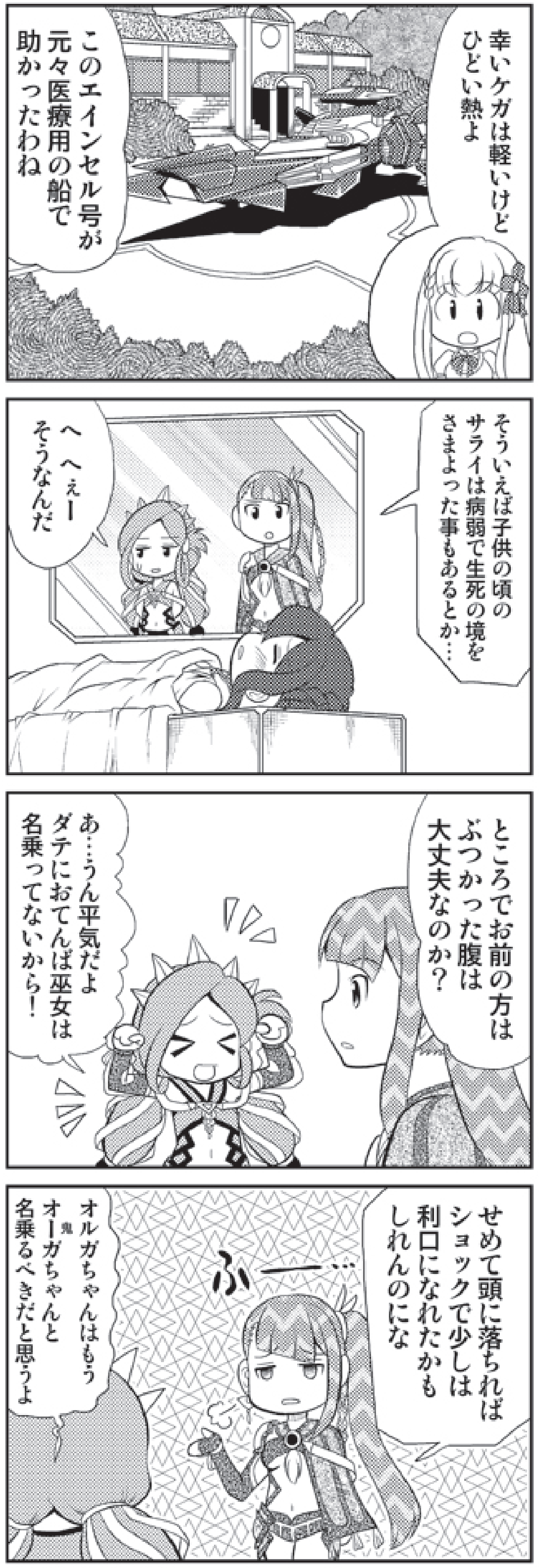
★イースIX発売おめでとう！★



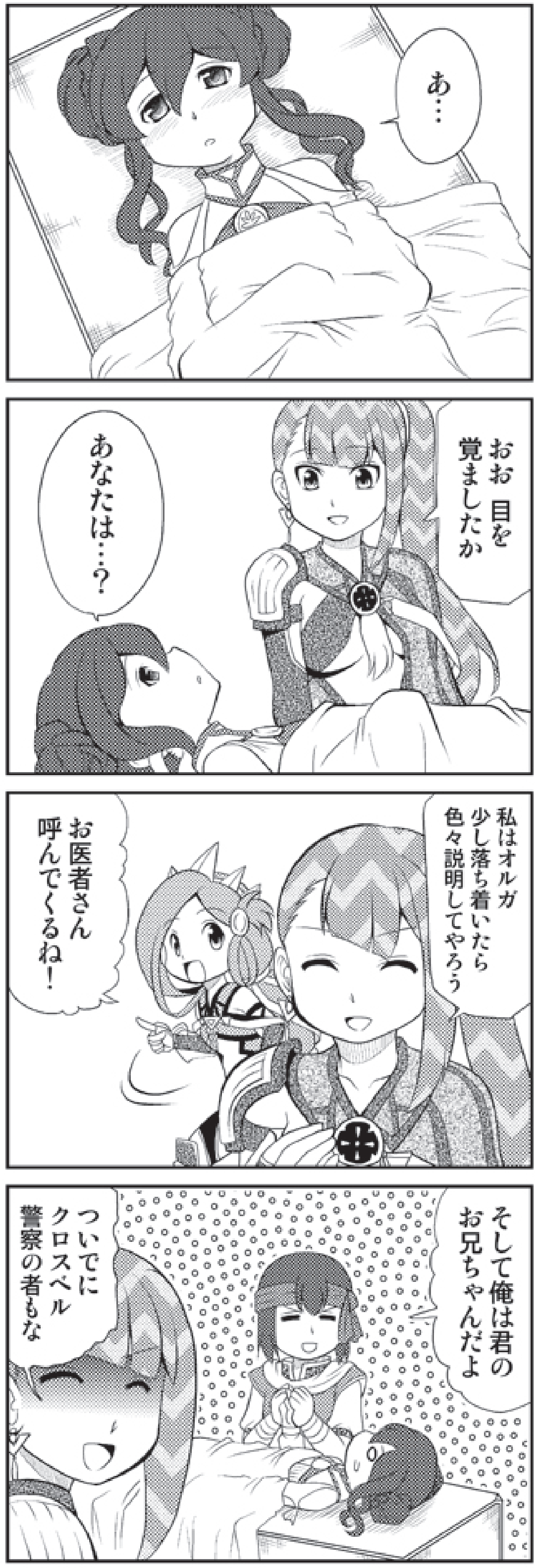
圧倒する子供



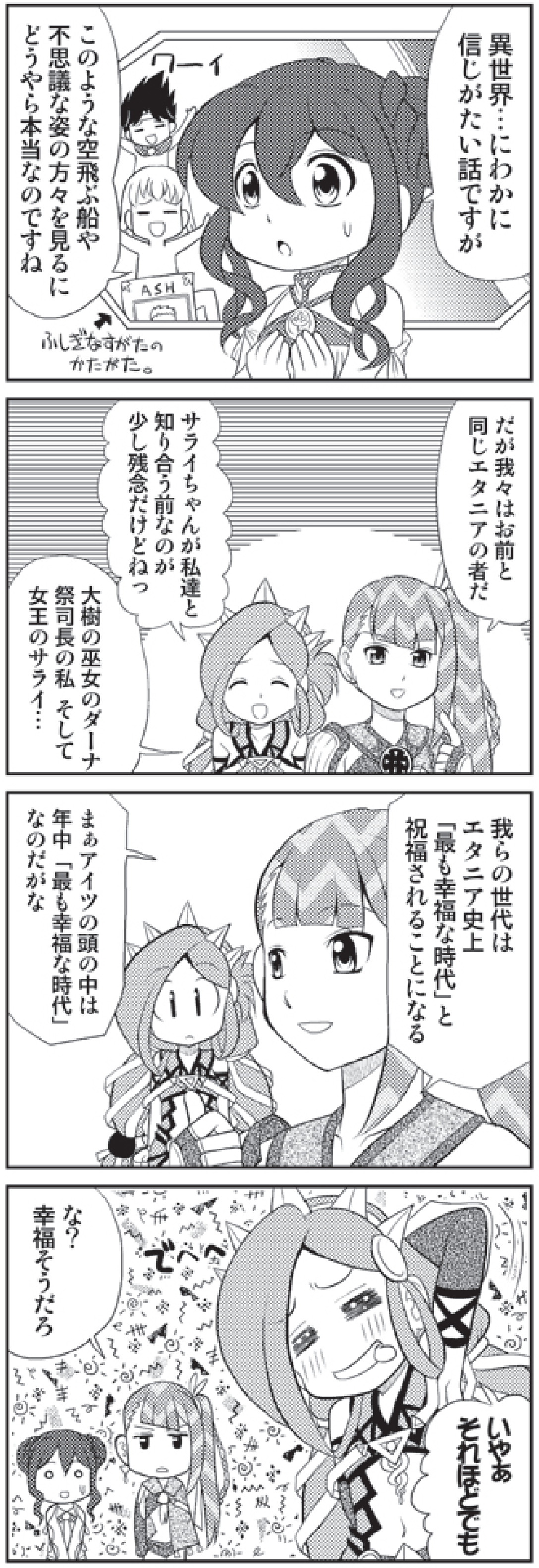
通り名



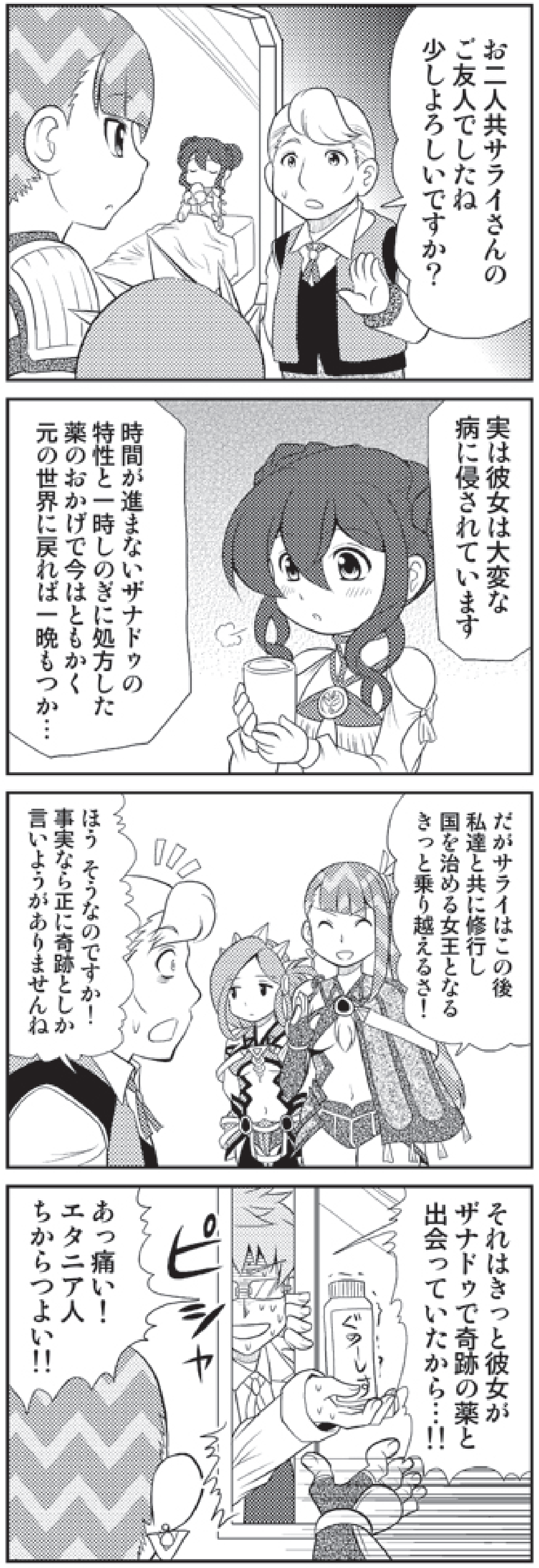
はじめての再会



幸福な時代



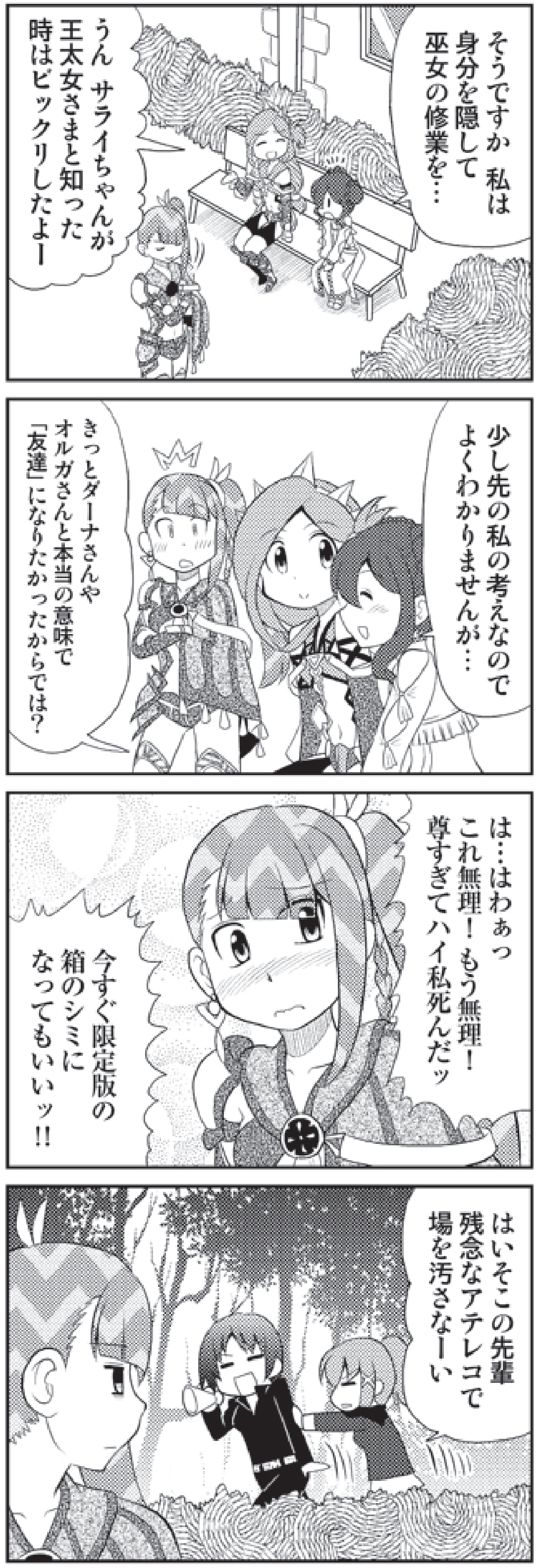
奇跡の出会い



サイレントエクササイズ



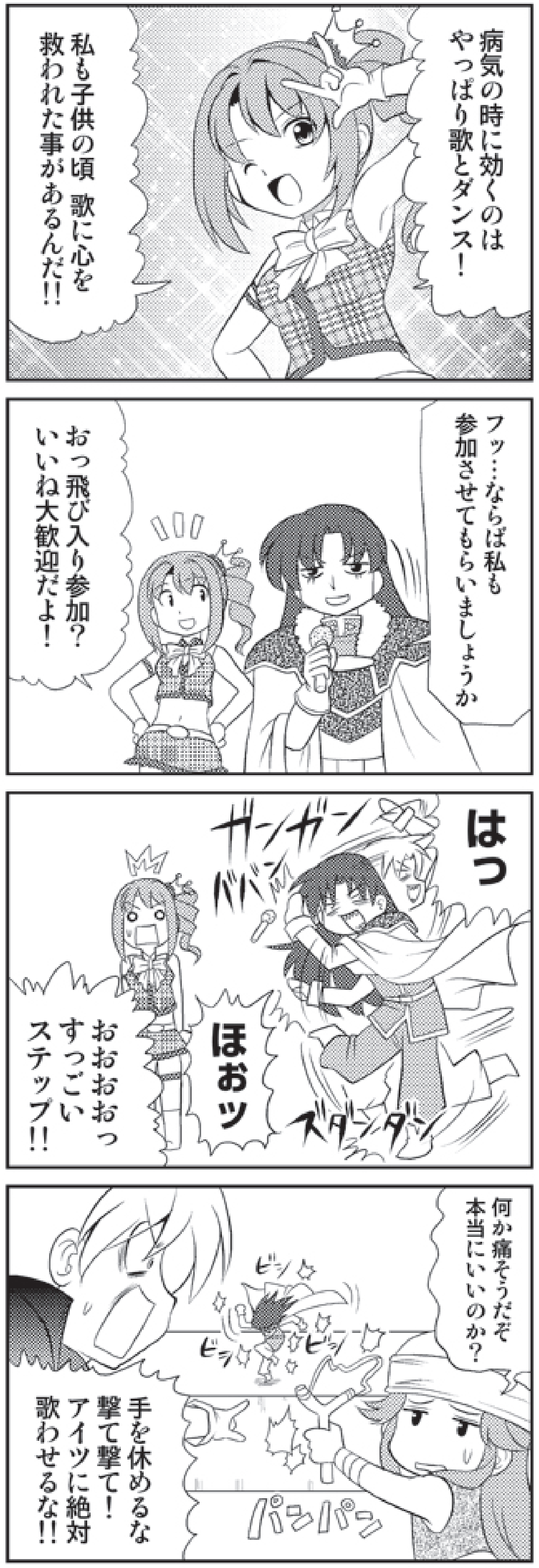
感情の代弁者



鬼ごっこ



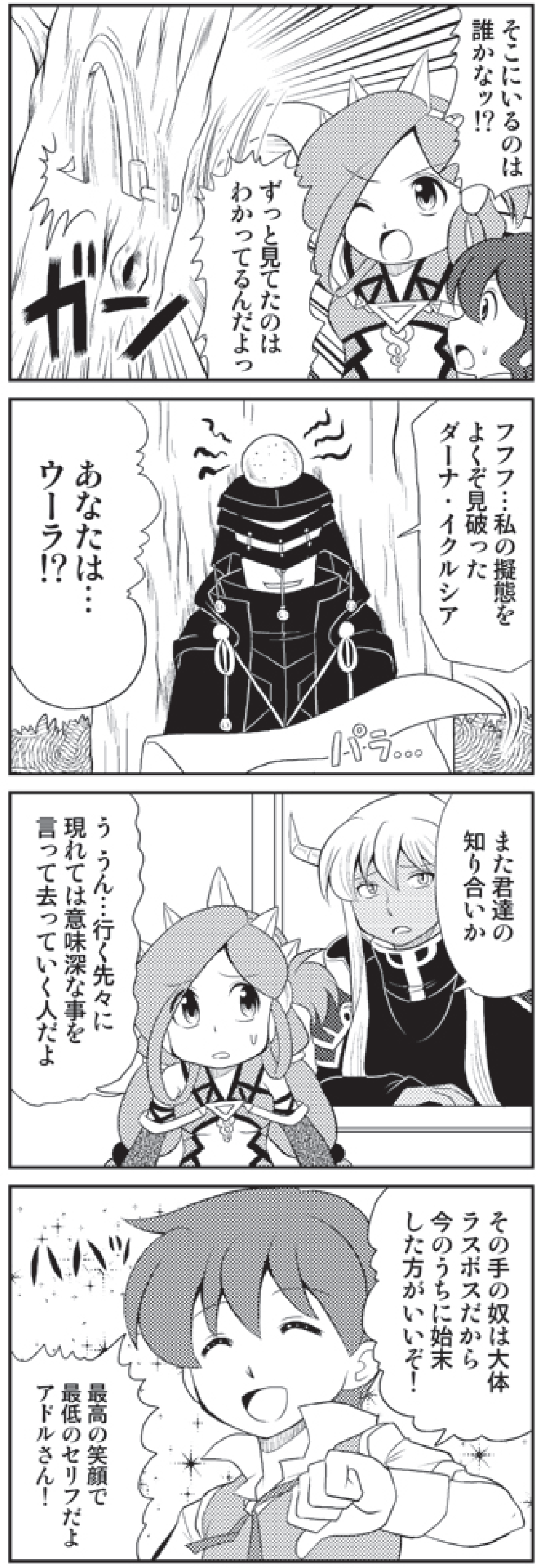
歌とダンスと暴力と



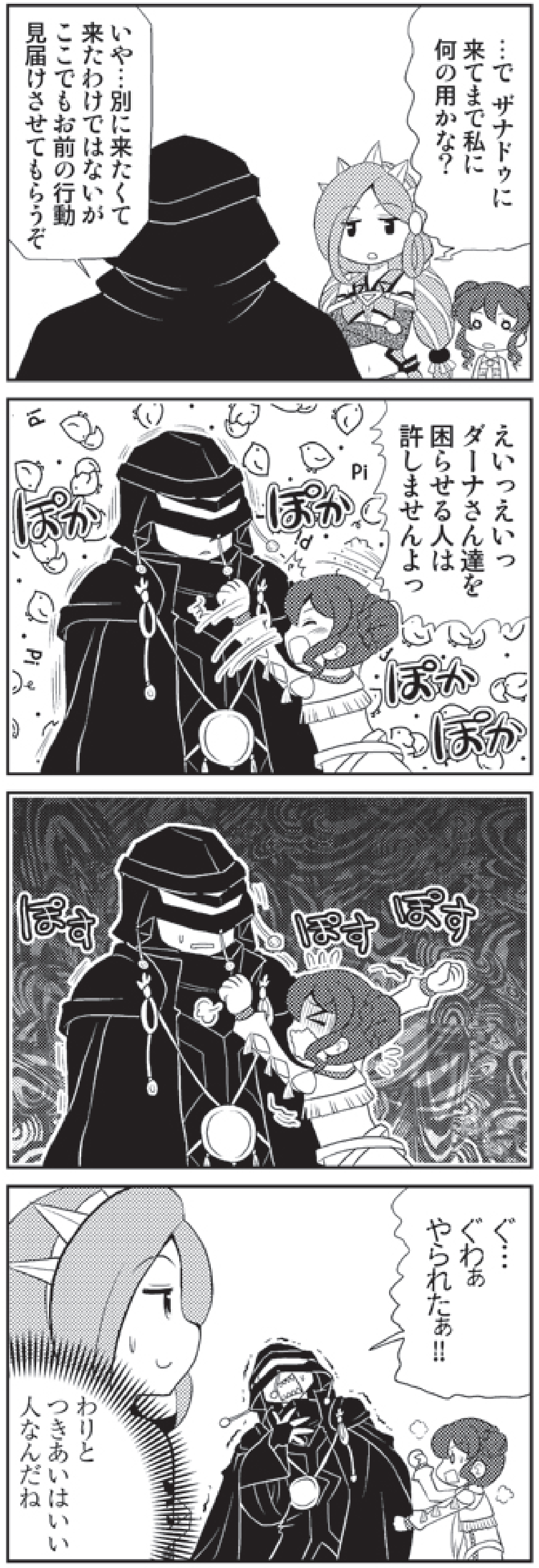
特効薬



メガネにも気をつけろ



困ったウーラさん



魂の代弁者

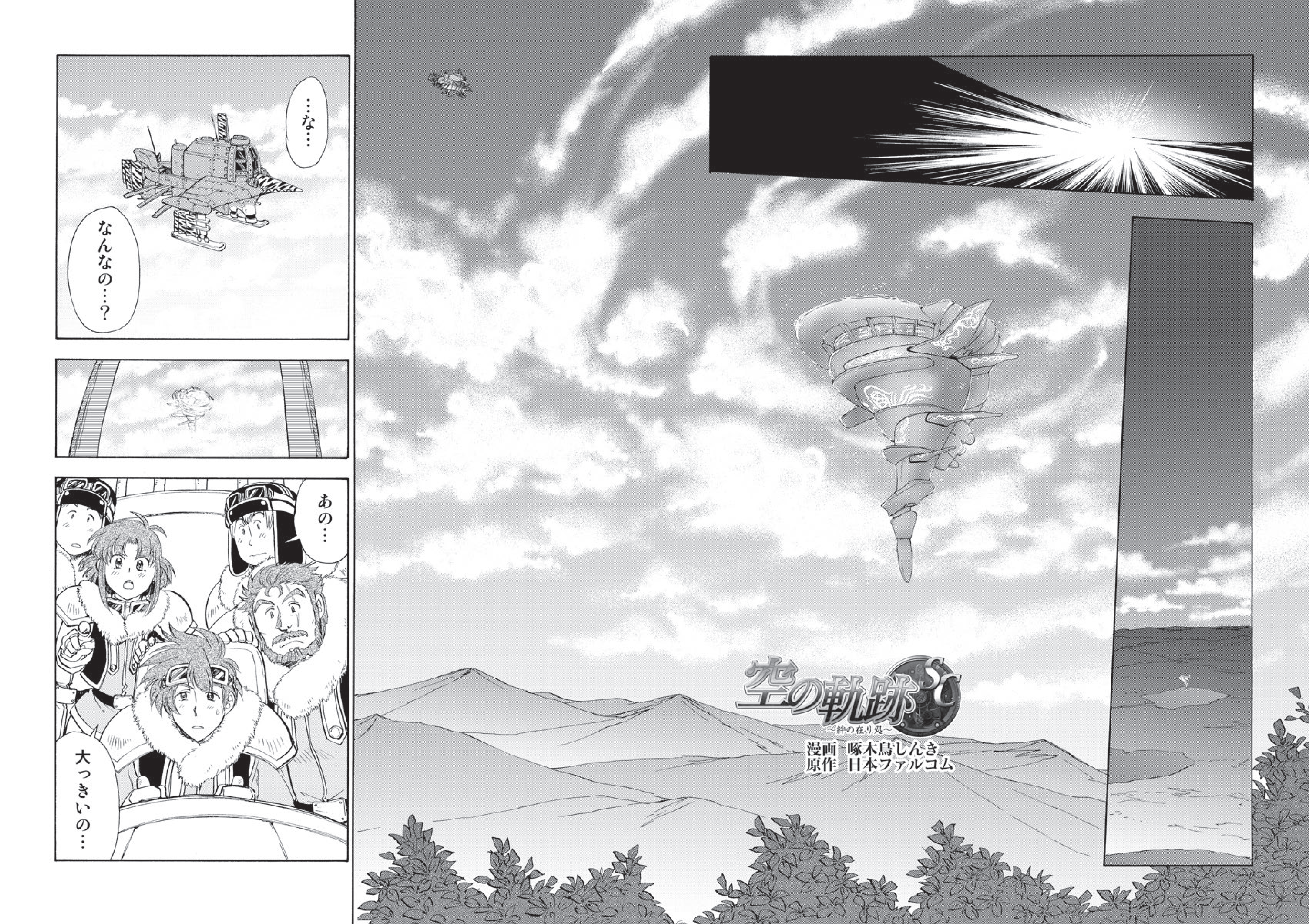


苦しみの原因




英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価:本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!


異世界《ザナドゥ》に
勇者よ再び!
も～っと集まれ!
ファルコム学園
① 著者:新久保だいすけ
定価:本体900円+税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！　果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS

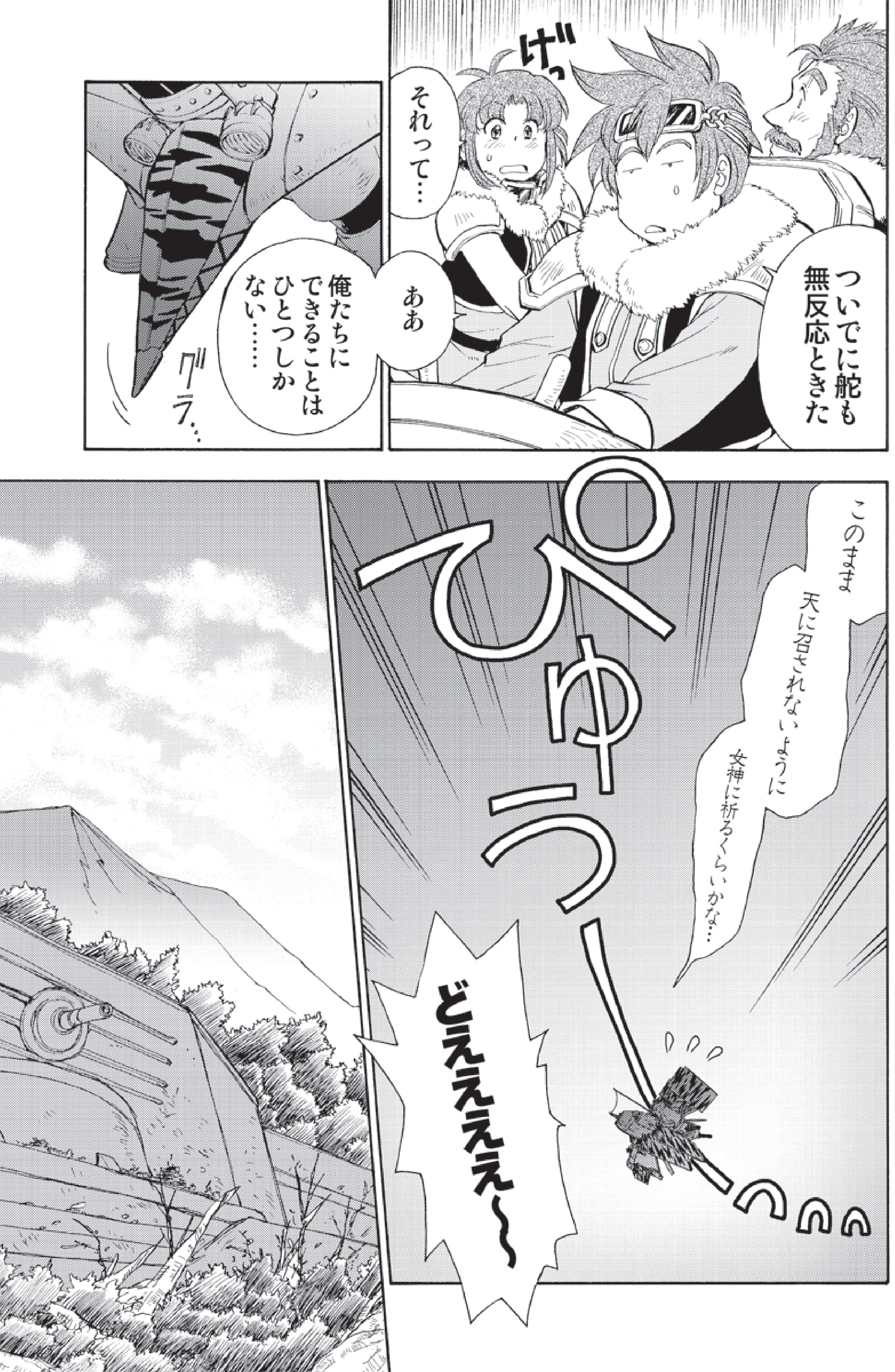

空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
…な…
なんなの…？
あの…
大っきいの…


あの浮島…
間違いなく
5千アージュ
以上はあるな
5千っ
基本は人工物
みたいだな
島っていうより
浮遊都市って
感じか…
浮遊都市
って……
あんな大きな街
どうやって
空に浮かんで
いられるの!?
なんか変だよ
昨日はあんなの
浮いてなかった
のに…
リベールからの
導力通信が全然
入ってこないのも
あれのせいじゃないの?
まさか
あれが
ヨシュアが
阻止しようとしてた
結社の計画…なのかな
もしも
結社の
連中が
あの浮遊都市を
甦らせちゃった
としたら……

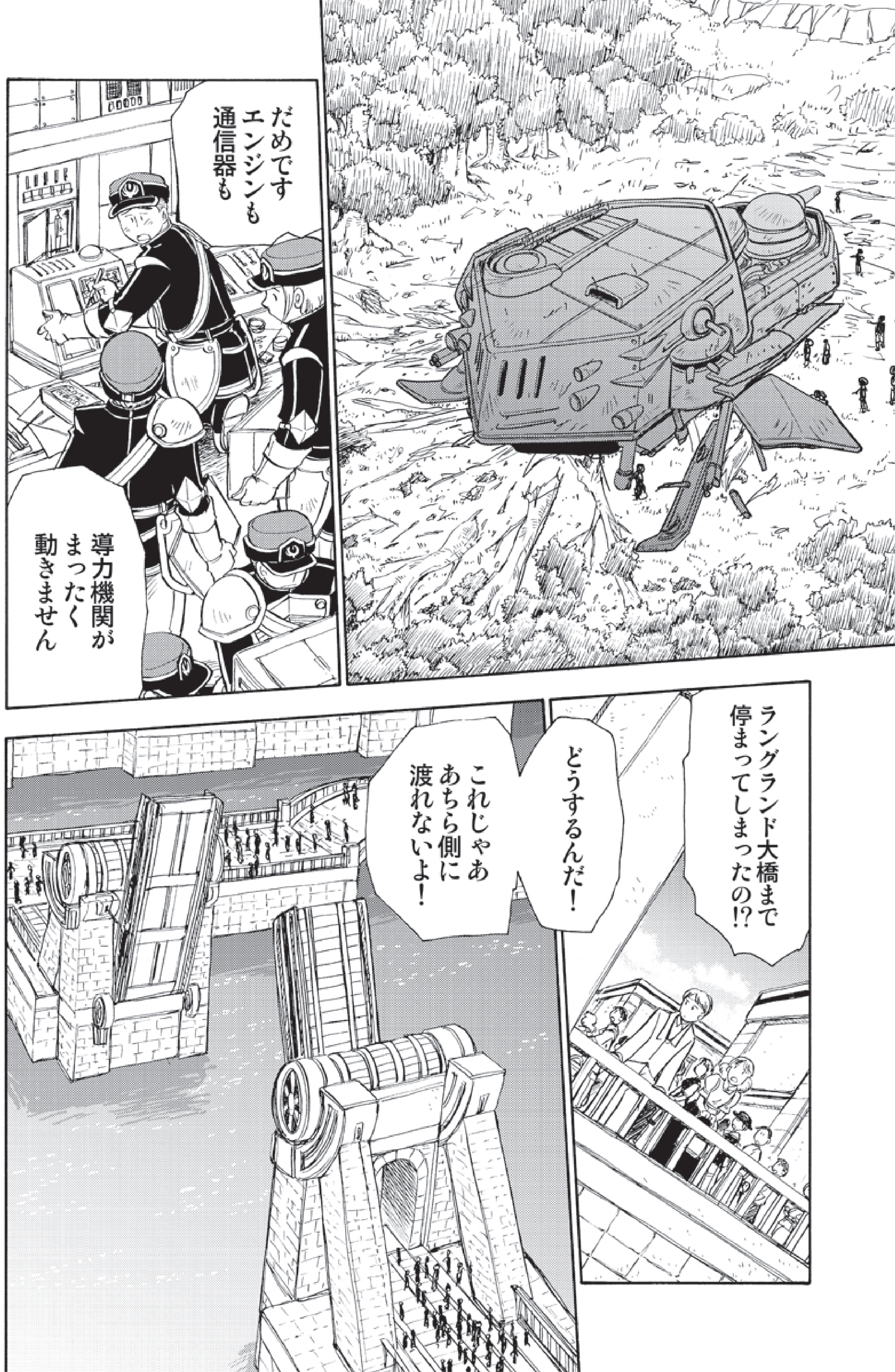

あそこには…
ドデカイ
お宝が
わんさと
眠ってるに
違いねぇな
え…
キール!
ジョゼット!
野郎ども!
このまま
浮遊都市に
乗り込むぞ!!
ええ——っ
本気なの!?
ドルン兄!?
あたぼうよ!
こちとら
天下の空賊
だぞ!
勘弁して
くれよ~
さすがにあれは
俺たちの手には
負えないぜ

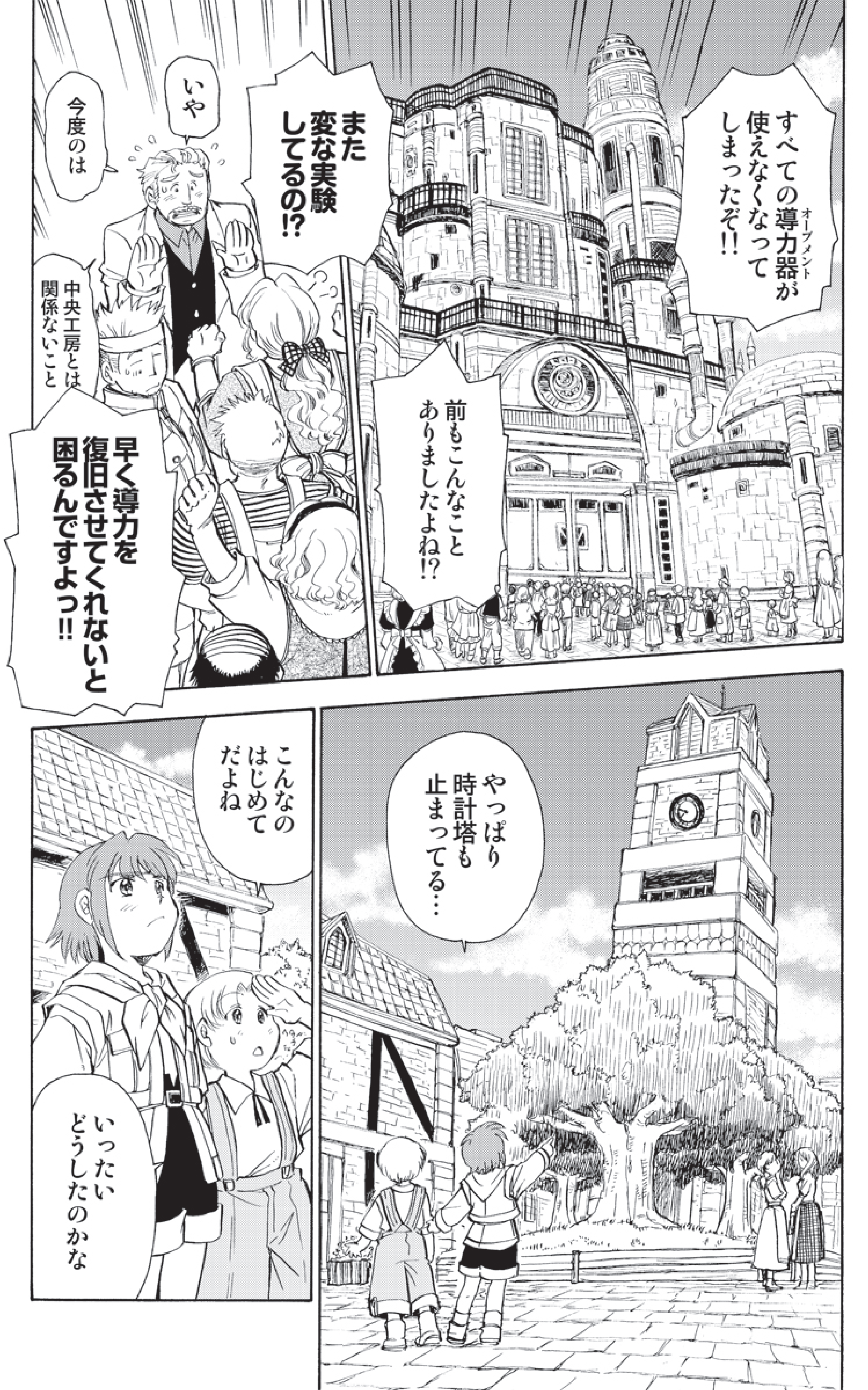


え？
なに？
光の…
波…？
ふわっ
ブゥウ…ン
なんだ!?
故障か!?
お頭!!
大変だ!!
導力機関がいきなり停止しちまった!!
なんだと!?
お頭ぁ!!
飛翔機関がぁ!!
反重力フィールド!!
どんどん低下してってます!!



げっ
それって…
ついでに舵も無反応ときた
ああ
俺たちにできることはひとつしかない……
グラ…
このまま
天に召されないように
女神に祈るくらいかな…
ぴゅうっ～
どえええええ～


だめです
エンジンも
通信器も
導力機関が
まったく
動きません
ラングランド大橋まで
停まってしまったの!?
どうするんだ!
これじゃあ
あちら側に
渡れないよ!


すべての導力器(オーブメント)が
使えなくなって
しまったぞ!!
前もこんなこと
ありましたよね!?
また
変な実験
してるの!?
いや
今度のは
中央工房とは
関係ないこと
早く導力を
復旧させてくれないと
困るんですよっ!!
やっぱり
時計塔も
止まってる…
こんなの
はじめて
だよね
いったい
どうしたのかな


くそっ
どうなってやがる!?
こんな街付近の街道に
どうして魔獣が湧いて出てくるんだ！


すべての異変の原因は
やっぱりあいつか!?
《輝く環（オーリオール）》
…なんとかしなくちゃ
次回に続く


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に⁉
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……⁉
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


英雄伝説
空の軌跡SC
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
4
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第4巻！
やっとあたしは、
ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

軌跡シリーズ15周年を記念した新商品が続々登場!!

■大好評発売中！！

ドレスやスーツを身にまとった「閃の軌跡 IV」ED イラストのグッズは必見!!







■ 10 月 19 日 (土) より「英雄伝説 閃の軌跡」シリーズ新商品発売開始 !!

「閃の軌跡 III」「閃の軌跡 IV」から武器を身に着けたミニキャラグッズが Falcom Base に続々登場！
さらに、「閃の軌跡 IV」ED イラストグッズにも追加アイテムが登場！









●取扱店舗
GraffArt Shop 池袋本店、なんば店、名古屋店内Falcom Baseにて
●予約は通販サイトでも受付中
http://kyaragoods.shop-pro.jp/

「イースⅨ」特製コースターを集めて特別賞をGET！

『イースⅨ -Monstrum NOX-』×『立川あにきゃん』コラボキャンペーン開催中!!

開催期間:2019年9月20日(金)〜10月6日(日)

東京立川市で例年開催されるサブカルチャーイベント「立川あにきゃん」と同市に本社を置く日本ファルコムが今年もコラボキャンペーンを開催！　開催期間中、立川の商店街で飲食・お買い物をして頂いた方に先着で『イースⅨ -Monstrum NOX-』の限定リバーシブルコースター(全8種)をプレゼント！





「イースⅨ」&「軌跡シリーズ」非売品クリアファイル



オリジナルコースター全8種

【キャンペーン特別賞】
更に、10月19日(土)に東京都･立川市で開催される「立川あにきゃん2019」イベント会場にて、全8種類のコースターのうちいずれか4種類を持参された方に、先着順でコラボキャンペーン特別賞として「イースⅨ」&「軌跡シリーズ」非売品クリアファイルをプレゼントいたします。

《参加方法》
期間中､キャンペーン参加店舗(25店舗)でのお会計時に「立川あにきゃん」公式ページの画像､もしくは参加店舗に設置されているイベントフライヤーをご掲示ください。
※期間中でもコースターがなくなり次第イベントは終了となります。

■主催団体:立川あにきゃん実行委員会
http://tachikawa-anican.com/

《「立川あにきゃん2019」コラボキャンペーン紹介ページ》https://tachikawa-anican.com/topic/machi-meguri/#858
《イースⅨ -Monstrum NOX- 公式サイト》https://www.falcom.co.jp/ys9/

【ドラゴンアウェイクン】×『空の軌跡』コラボ第1弾！

魔獣「シャイニングポム」を倒してコラボ限定レアアイテムをゲットしよう！



株式会社インゲームでは、ブラウザ向け本格ファンタジー RPG【ドラゴンアウェイクン】で、大人気RPG『空の軌跡』とのコラボ第1弾を開催中。第1弾は、魔獣「シャイニングポム」が出現します！

シャイニングポムを倒すと、ゲーム内アイテム「ハーモニカ」が手に入ります。

「ハーモニカ」を複数集めて交換すると、アイコン券「ティータ」や称号券「S 級遊撃士」など、コラボならではのレアアイテムが手に入ります！ぜひゲットして、あなたも遊撃士を目指そう！また「ハーモニカ」を【ドラゴンアウェイクン】の通常アイテムと交換することもできます。交換可能のアイテムは、「魔法のハムスターの破片」や「碧鱗煌竜の引換券」など多数出現！　こちらにもぜひ注目しよう！







魔獣「シャイニングポム」



「ハーモニカ」



アイコン券「ティータ」



称号券「S級遊撃士」

■イベント詳細
公式サイトはこちら
http://ingame.jp/gameinfo/da_ingame_landing.php
公式ツイッターはこちら
https://twitter.com/dragonawaken_jp
《イベント実施日》
空の軌跡コラボ第1弾
2019年9月25日(水)メンテナンス終了後〜2019年10月8日(火)23:59
《対象サーバー》
全サーバー

■新騎登録者応援キャンペーン実施中!はじめるなら今がおすすめ!
新しく【ドラゴンアウェイクン】を始める方限定で、特典満載の新規登録者応援キャンペーンを実施中!限定英雄がもらえるなど、はじめるなら本当に今がおすすめ!　ぜひお見逃しなく!
※本記事の内容は開発中のものです。実際の使用とは異なる場合があります。



「イースIX」モバイルバッテリー&手帳型スマホカバー販売開始!

新型モバイルバッテリー

5,000mAh(販売価格 5,980 円税込)+ 送料 520 円

■アプリリス
■全怪人集合
■赤の王

《仕様》

・充電用ケーブルはバッテリー本体に収納可能で、Android、iPhone(lightning)コネクタが付属しているので機種を選びません。
・スマホを2回分充電可能な5,000mAh

USBの次世代規格「USB3.1」で制定されたType-Cを標準装備、残量確認用スイッチ装備

電池容量 5000mAh　電池タイプ リチウムポリマー電池
サイズ 105×64×13mm
出力電圧 急速2A　充電回数 500回以上　重量 114g　裏表両面印刷

■アプリリス



■全怪人集合



■赤の王



新型モバイルバッテリー LED ライト付き

5,000mAh LED ライト付き(販売価格 6,480 円税込)+ 送料 520 円

■アプリリス



■全怪人集合



■赤の王



《仕様》

・充電用ケーブルはバッテリー本体に収納可能で、Android、iPhone(lightning)コネクタが付属しているので機種を選びません。
・スマホを2回分充電可能な5,000mAh

USBの次世代規格「USB3.1」で制定されたType-Cを標準装備、残量確認用スイッチ装備

電池容量 5000mAh　電池タイプ リチウムポリマー電池　サイズ 105×64×13mm
出力電圧 急速2A　充電回数 500回以上　重量 114g　裏表両面印刷
【LEDライト】
W数／1W、Lm数／30Lm





新型手帳型スマホカバー

(販売価格 4,380 円税込)+ 送料 520 円

① 81㎜ × 159㎜ のサイズに収まる機種ならOKです。
② iPhoneXS MAXまで収納可。
③ 写真撮影時はスマホ本体をスライドしてご使用になります。
④ 開け閉め簡単なマグネットタイプ。
⑤ スマホ本体を直接粘着シートに貼りつけて使用します。

■新型手帳型スマホカバー(全怪人集合)



■新手帳型スマホカバー(猛牛)



■新手帳型スマホカバー(人形)



ECサイト　ｉｏ・琳派:https://iorinpa.thebase.in/categories/652176

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。９月はついに「軌跡」シリーズ最新作「閃の軌跡Ⅳ」から新キャラクターが参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

「閃の軌跡Ⅳ」から ユウナ・クロフォード が参戦！

ユウナ・クロフォード

トールズ士官学院・第Ⅱ分校の特務科《VII組》のメンバー。旧クロスベル自治州出身でクロスベル警察《特務支援課》に憧れ警察の道を志していたが、諸事情により移籍してきた。正義感に溢れる活発な少女。

9月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

受付嬢・キリカ

シリーズが進むごとに新たな側面を見せているキリカだが、やっぱり彼女といえばリベール王国の遊撃士協会ツァイス支部でのこの姿！　東方由来のエキゾチックな衣装がマッチしている。

特務少佐・レクター

レクターもキリカ同様に、シリーズごとに様々な一面を見せてくれる魅力的なキャラクター。今回はオズボーン宰相直属の《鉄血の子供たち》の一員で、帝国軍情報局の特務少佐となっている姿で登場だ。

10月の新規衣装替えキャラクターは？



※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

■

第1話　瞳にハイライト



ドロシー・ハイアットは好奇心の塊である。
それは記者であるナイアル・バーンズとて同じなのだが、厄介なことにドロシーには怖いものがなかった。
幽霊、と聞けば、「面白そう」と言ってカメラを構えるような性格なのだ。
だからこそ、見えるモノもあるのだけれど……。

※

「なあんで、俺が撮るとこうなるかなー」
ナイアルは写真を指ではじいた。
ひらりと机の上に落ちた一葉は、ひとりの娘を映したもの。
彼女の名は、ドロシー・ハイアットというのだが……。
「ただいまー」
噂をすれば影。ホテルの部屋の扉を開けて当人が帰ってきた。
「おう、ドロシー」
「今、戻りました。取材は進みましたか、ナイアル先輩」
「いやまったく」

前市長の逮捕というスキャンダルに端を発するルーアンの市長選挙は、対立する二候補の激しい戦いになっており、今のところ趨勢は五分。どちらが勝つかわからない状況だ。
取材対象を絞るわけにもいかず、ナイアルはやや疲れ気味だった。記事のほうもさっぱり進まない。
「……すらんぷですかぁ？　おや、それは何でしょう？」
しまったとか、待てと、声を上げる間もなく、ナイアルの傍に駆け寄ってきたドロシーが写真を摘みあげる。
「ああ、これは。この前の打ち上げでナイアル先輩が酔っぱらったときにわたしのポチくんを奪って撮った写真ではないですか」
「その丁寧な思い出しっぷりは、絶対嫌味だろ」
「ええまあ」
「否定しろよ！」
「オーバルカメラのオート機能を使ってさえのこの手ぶれっぷりと、生気を失ったゾンビのような顔で写された当人としては、これくらいは言ってもよいかと」
「う……まあ。すまん」
そうなのだ。
ナイアルは文章を書くのが本業であってカメラは本職ではない。目の前にいるリベール通信

社始まって以来の天才カメラマンと呼ばれるドロシーには及ぶべくもない。
とはいえ、下手にもほどがある、とナイアルは毎度思う。
まさか、「ゾンビみたいな顔」とまで言われるとは思わなかったが。自分の顔だぞ、それ。
「おまえさんが撮ると、妙に生き生きして写るよな」
「ポチくんへの愛情の差です」
「カメラ愛の差だけとは思えんのだが。なんか、コツとかあるんじゃないのか?」
ポチくんってのは、愛用しているオーバルカメラにドロシーが付けた名前だ。
「まあ、多少はありますよぅ」
言いながら、片腕に抱えていた紙袋をテーブルの上に置いた。袋の口が開いて、写真の束が顔を覗かせる。
そういえば、焼き付けた写真があがってくるから取りに行くと言って出たのだった。
一枚を選んでナイアルのほうへと向ける。
「これとか」
写真は制服の少女三人を写したものだった。
ジェニス王立学園の生徒たちだ。
ホテルのあるルーアンの街から半日ほど歩いた距離にある全寮制の学園で、良家の子女も多く集まる学校だった。国内での知名度も高い。

つい先日、ドロシーは、その学園からやってくるという『白い影』を追って、エステルという名の遊撃士の少女とともに訪れたのだ。
「本当は、その前の学園祭の時期に訪れたかったんですよねぇ」
「ほう」
「飾りたてられた校舎や寮を見てみたかったですし、お姫さまの格好をしたヨシュア君を写真に撮りたかったですー」
「お、おう」
撮られる当人の気持ちになると、来ないでくれと言いそうな気もするが。
ヨシュアが聞いたら嘆くだろうことを、さらりと言っていた。
「残念です。次の機会に期待! でしょうか」
「そ、それより、こっちの写真だが」
三人娘の写真を見る。
「体育系と文系とお洒落系といった感じだな」
「三人とも可愛いですよぅ」
「可愛くないとは言ってねえ」
「なるほど。先輩は制服フェチでしたか」
「ちげえ! 人聞きの悪いことをぬかすな!」

同じ制服を着ているからこそだろうか。写真の中の三人は個性の差が際だって見えた。仲良く肩を並べ、三者三様のポーズをして笑顔で映っている。
ナイアルが写した写真と、明らかに違う。
いったいどこが……。
「たとえばですね、ほら、ここです」
ドロシーの細い指が三人娘の瞳を指した。
「ん？　確かにちがうな。んっと」
「瞳が空の色を反射して光っているでしょう？　いわゆるハイライトってやつですねー」
なるほど、そのとおりなのだった。
瞳の部分だけ拡大すれば、おそらく青い空が映っているにちがいない。
対して、ナイアルの撮った写真はといえば――。
「目にハイライトがねえな」
「だから、死んだ魚の目みたいなんですよぅ。いわゆる、デビルフィッシュアイですね」
「それを言うなら、デッドフィッシュだろ」
悪魔にするなってーの。だから自分の顔だろうが。いいのか？
「てか、その言い回し正しいのかよ」
――いまいちコイツの専門用語は信用できねえ。

「とにかくですねー。屋内なんだから、相手に導力灯のほうを見てもらうなり、フラッシュを使うなりしないと」
――話を逸らしやがった。
後に続くカメラ技法の説明をナイアルの脳は聞き流した。どうせ聞いてもわからない。
しゃべり疲れたドロシーが水差しを傾けるタイミングで、ナイアルは口を挟む。
「で、今からそいつを届けに？」
「はい。といっても、必要なのはこの――」
言いながら、一枚の写真を見せてくる。
「こいつはランチか？　えらく豪勢だな。量は少なめみたいだが」
「お嬢様プレートって名前のランチです」
皿の上に乗ったセットランチの写真だった。
「ひゅう。お嬢様、ときたか。さすがはジェニス王立学園ってところだな」
「食堂のメニューを、白黒イラストから総天然色の実物の絵にしたいそうで」
「そこは素直にカラー写真って言えよ。おばあちゃんか、おまえは。……うまそうに撮れてるじゃねーか」
「先輩が誉めるなんて、胃腸の調子でも悪いんでしょうか」
「いや俺だって誉めるときはちゃんとだな」

そんなに鬼先輩と思われているのだろうかと、ナイアルは内心複雑な気持ちだ。
いや、そんなことよりも心配なことがあった。
「これから学園までひとりで届けに行くつもりか？」
こくりと頷く。
「先輩はお忙しそうですし」
「王立学園までって、あぶなくねーか？」
「手配魔獣は遊撃士さんたちによって退治されたばかりですし、街道から外れさえしなければ大丈夫かとー」
「外れなければな！」
「信用してください」
「したいが、できねーな」
ツァイスでほけっと街道を外れて魔物に絡まれたのはいったい誰だったか。後で話を聞いて、ナイアルはとても焦ったのだ。
「古い学園だからな。旧校舎には魔獣が出たって話だし、幽霊だってほんとに出ないとは限らねえぞ」
「そ、それは……おっかないですね！」
「瞳をキラキラさせながら言うんじゃねえ！」

「もし出たら、今度こそ絶対撮ってきますから！」
「あぶねえから、気をつけろって言ってるんだよ！　いいか？　誰も付いていけねえんだから、自重しろよ、自重！」
「しくしく」
口では泣きまねをしつつ、ドロシーはうきうきと旅の準備を始めた。
――言い出したら聞かねえのはお互い様か。ほんとにこいつは怖いもの知らずで。せめて街道を付き添ってくれる遊撃士でもいねえか、問い合わせてみるとするか……。
ナイアルはこっそりとため息をついてしまう。

かくなる上は――。
学園に行っておとなしく写真を渡すだけで帰ってきてくれることを空の女神エイドスに祈るのみだ。
そう思いながらもナイアルは、ドロシーは歩いた先から事件に巡り合う体質じゃないだろうかと、疑いを捨てきれない。
――こいつの好奇心を刺激するような事件が起きなきゃいいんだが……。

†

半日後――。
夕焼け空を背景にして、ドロシーはジェニス王立学園の門を通り抜けた。
――まったく先輩は心配しすぎですよぅ。
心の中で独りごちる。
街道に危険なんてなかった。
道中で魔獣に絡まれることもなく、学園に至る直前までヴィスタ林道を同行してくれた遊撃士の人だってあまりに安全だったので拍子抜けしたくらいだ。
いや――正確には一度だけ魔獣を見ている。
学園から十セルジュほど手前の林道で一頭のウリボアと出くわしたのだ。猪に似たその魔獣は気性が荒く、目についたものすべてに突進してゆく性質をもっている。
姿を見たときは口の中がカラカラになるほど緊張したのだけれど。
そいつはドロシーたちに目もくれずに、林道を横切ると、山のほうに向かって走っていってしまった。獲物を追いかけている最中だったのだろう、と遊撃士のおじさんが言っていた。拍子抜けしたのって。
起こったことと言えばそれくらいで、日の落ちる前にドロシーは学園に辿りつけたわけだった。

門を越えて、敷地の東のほうへと歩いてゆく。
夕映えに赤く染まる本館の右手に、二階建てのクラブハウスが建っていた。その建物の一階が食堂になっている。
中に入ると、カウンターにいた給仕係のおばさんがドロシーを見つけた。
「あら、あんた」
「こんにちは、デボラさん。写真ができあがりましたよー」
鞄から出した写真を見せる。
「早かったわねえ。あらまあ。綺麗に撮れていること。すごいね、あんた。さすがはプロだよ！」
手放しの褒めようがドロシーにはちょっと照れくさい。
体温がわずかに上がってしまう。
「あ、あの、いちおう確認をお願いします」
チェックのためにデボラが食堂のメニューをカウンターまでもってきた。
置かれた紙片に視線を落として、ドロシーは「おや？」と思う。薄手の上質紙に飾り文字を使って書かれたメニューは、細ペンで描かれた料理の絵が添えられていて、前に見たときもおいしそうだなと思ったものだが……。
「あれえ、アイスがないの？」
ドロシーの背後から可愛らしい声がかかった。振り返ると、王立学園の女生徒がひとり、ド

ロシーの肩越しに伸びあがるようにしてメニューを見つめていた。
　見つめる先のメニューには、彼女の言ったとおり、ロイヤルジェラートのお品書きを隠すように付箋が貼ってあり、『品切れ』と上から書かれている。
「品切れって、ほんとに一個もないわけ？」
　と、疑わしげな目でデボラを見つめている。
　――あれ、この子ってば。
　その少女は、つい半日前にナイアルに見せた写真に写っていた子だ。仲良し三人娘のひとり。ナイアル先輩が『お洒落系』と評していた子だ。制服ではなくまるで衣装のような可愛らしい服を着ていた。もう夕方だし授業は終わっているのだろう。この子の名前は確か……。
「アリスちゃん、あのね」
「どこかに一個くらい隠してあるんじゃないの？」
「ど、どこにも隠してやしないよ。それに、アリスちゃん。もうすぐ夕食の時間だよ？」
「甘いものは別だから大丈夫！」
「そう言って、みんな乙女の秘密を増やしていくんだよ……」
　デボラの言葉に、ぐさり、と心臓に矢を突き刺されたような仕草をしてしまう。
　アリスと――ドロシーと。
「あんたたちね……」

「し、仕事の後にはですね。疲れた身体には甘いものが必要でして……」
「そ、そうよ！　そうなの。勉強に疲れた脳は糖分を必要としてるんだってば！　食べれば頭もすっきり眠気もふっとぶってもんよ！　ね、そうよね。おねえさん！」
「そ、そうです。そうですよぅ！　そのとおり！」
「あたしたちとっても気が合いそう！」
「ですですー」
「あんたたち……言って欲しいのかい？」
「え」
「う」
「太るよ、と」
「「言わないでぇええええ！」」
　ドロシーとアリスはきれいなユニゾンで悲鳴をあげたのだった。

†

「ミルクがなくなっちゃったんだよ」
と、カウンターの向こうでデボラが肩をすくめた。
「うちのは自家製だからさ。作り置きがなくなると、入荷待ちってことになるね」
「ミルクなんてどこにでもあると思うけど」
アリスの言葉に、デボラが首を振る。
「ダメダメ。ロイヤルジェラートにはとびきり新鮮なミルクを使うってのが大事なんだからね！　とれたての卵と新鮮なミルク。それが美味しいアイスクリームを作る秘訣だよ！　明日には入ってくるから我慢しておくれ」
「残念ですー」
ドロシーとしては職人気質もわかるのでおとなしく頷くしかない。
まあ、ロイヤルジェラートならば王都の本社に帰れば食べられるし。アリスは不満そうな顔をしたままだったけれど、ないものは仕方ない。
写した写真でも見て心を慰めるしかなかった。お腹はちっとも膨れないけれど。
「おねえさん、カメラマンなの？」
カウンターに広げたままの写真を見てアリスが言った。
「あ、はい」
「あれ？　そういえば、この前あたしたちのこと撮ってたひと？」
そうですよ、と頷く。
覚えていてくれたようだ。
先輩記者にも見せた写真を封筒から取り出してみせた。
「あ、これこれ。パープルやモニカと一緒に撮ったやつ！」
「はい。お会いできたらお見せしようと思いまして。あ、デボラさんのも、こちらに」
前回訪れたとき、先生や生徒たちの写真を三十枚ほど風景を五十枚ほど写している。それらはひととおり焼き付けて持ってきていた。
「はあ。これがあたしかい。うまく撮るもんだねぇ」
「ホント！　まるで別じ……あ、ちがうってば」
食事の盛りを減らされたいのか、そんな視線で睨まれていた。
「ま、でも、十歳は若く見えるね！　これなら、学園の生徒にも混ざれそうだよ！」
「え……」
それはどうだろう？　という言葉を慌てて呑み込む。
「でも、ほんとにきれい。食べちゃいたいくらい」
料理の写真を見ながらアリスが口許に小さな指をあてた。
「お腹減ってきちゃったなぁ」
「間食は控えたほうがいいよ。ドロシーさんの写真で我慢しな」

「余計お腹が空いちゃうってば！」

　喜んでいいのかわるいのか。

　カメラマンとしてはうれしいけれど。

「ねえねえ、おねえさん。お仕事はもう終わり？　写真、友だちにも見せてあげたいんだけど」

「あ、ええと。まだ、こちらから選んでいただかないと――」

「選ぶだけでいいんだろ？　戻ってくるまでに見ておくよ」

　そう言われて、ドロシーはお願いしますと頭を下げた。食堂のメニュー用の写真とデボラを写したものだけ置いて、アリスに付いていく。

「そういえば、食堂に何か用事があったのでは？」

「生徒会室のほうにね。会長さんに会いに行ったんだけど、いなかったの。これ、学園祭で着た衣装で、今度これを着てモデルをするのよ」

「モデルですか。すごいですねぇ」

「すごくないよ。うちの美術部のだもん」

　アリスが着ている服は、元々美術部に所属している生徒が作ったものらしい。終業後に時々引っ張り出して着ていたところを見つかってしまい、モデルを頼まれた、という話。

　衣装みたい、と感じたドロシーの感想は的を射ていたわけだ。

　アリスは謙遜するけれど、同性の目から見ても、カメラマンとしても、可愛らしい衣装を着

こなしていて、モデルにしたいという気持ちがよくわかった。

　頭の左右でお団子にした髪型もとても似合っている。

「あたしだけだと恥ずかしいし、どうせなら、他の人にもモデルさせちゃおうかなって。それで、学園祭の時の衣装を貸してもらえるか訊きに行ったんだけど」

　生徒会長は不在だったわけだ。

「会長さんたちが便りにしていた人がひとり休学しちゃって……。最近、忙しいみたいなんだよね」

「そうなんですかー」

　女ふたりで話をしているとあっという間だ。女子寮へと辿りつく。

　二階建ての寮は、庭を挟んで男子寮と向かい合うように建てられており、王立学園の歴史を感じさせる造りをしていた。

　具体的に言ってしまえば古めかしい。いわくありげというか。

　この前、アリスたちの写真を撮ったときは、彼女たちの部屋の中だった。一階の奥だったはずだ。

　四枚扉の正面玄関をくぐる。左右に伸びる廊下と二階へと上がる階段が目に入る。

　廊下は市松模様のタイル張り。左手の空きスペースには、来賓用だろうか、椅子とテーブルがいくつか置いてあった。

「二階はぜんぶ三人部屋だけど、一階には、四人部屋から個人部屋まであるのよ」
アリスが言った。
廊下の片側にずらりと並ぶ扉はみな同じ形をしていて、飾り付けなどもされておらず、それがなんとなく学校っぽい雰囲気を醸している。
「この前はアリスさんたちのところしかおジャマしませんでしたけれど、改めて見ると部屋がいっぱいありますねー」
「玄関くぐったところから見ると、二部屋ぶんの扉しか見えないもんね」
「わたしも二部屋しか記憶してませんでしたから」
「やだなあ、もう！　そんなはずないってば！」
「ですよねー」
廊下の端の扉を開けて、アリスが中へと声をかける。
「たっだいまー！」
しん、と静けさが返った。
人の気配はあるのだけれど、返事はない。
角部屋だから、左手が窓になっていた。
明りの点けてない部屋に、かすかな黄昏の光だけが差し込んでいる。
奥のテーブルに背中を向けて座っている生徒の姿が見て取れる。

振り返らずに、覆いかぶさるようにして机に向かっている。声が聞こえてきた。
「ふふふ……。そう、そのとき老婆は壁に向かって囁いたの……」

†

地の底から響いてくるかのようなおどろおどろしい声だった。
後ろ姿はカチューシャをつけたふつうの女生徒なのに。
アリスが壁際のスイッチを入れると、導力灯がチカチカとまたたいてから点った。
だが、背中を向けた少女は明りが点ったことにも気づかないみたいだ。
小声で独り言を言っている。
「『リアや……そこにいるのかい？』と。真っ白く塗られたばかりの壁に向かって老婆は囁き、周りの人々は老婆の気が狂ったのかと思う。そのとき、ガリガリ、という微かな音が響いて……。ええと、そう。『爪で引っ掻くような』と。壁の『中から』そんな音が聞こえてきて、それからそれから。そうだわ！　猫の鳴き声が――いえ、だめ！　どこかにあったもの、そんな話。考えて、考えるのよ、パープル。ここが頭の使いどき……」

ぶつぶつとつぶやきながら、机に向かっている。
怯えた表情を浮かべていたアリスが、げんなりとした表情に変わった。
「閃いた！　血よ！　真っ赤な血が白い壁からじわっと染み出してくるの！　次の瞬間に、音を立てて壁が剥がれ落ちる！　崩れる土壁。倒れ込んでくる血まみれの死体。あがる悲鳴、飛び散る血しぶき、空の女神エイドス様を祭っている校内礼拝堂は一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図！　きゃあああ！　素敵だわ！　これこそホラーだわあああ！」
「いーかげんにしてよ、パープルったら！」
ずかずかと近づいて行ったアリスが、机の上の原稿用紙をひったくった。
「ああ、だめ待って。書くまで待ってぇ。消えちゃう。思いついたイメージが消えちゃうから書き終わるまで待ってぇえ！」
叫びながら涙まで流していた。
「あの……アリスさん」
いたたまれなくなってしまった。だって、ドロシーにも覚えがありすぎて。
執筆中に声を掛けられても返事を返せるナイアル先輩がうらやましい。事件記者は切り替えが早いのだろうか？
「もう！」
アリスが原稿用紙を返すと、パープルと呼ばれた少女は、二度と渡すまいとばかりに紙の上に覆いかぶさってペンを走らせる。
腕を組んでアリスは書きあがるのを待っていた。
その間に、ドロシーは部屋の中を見回した。
四人部屋とあって、けっこう広い。
ベッドが左右に二つでぜんぶで四つ。扉に掛けられた名札は三つだったから、ひとつは使われてないのだろう。シーツに皺ひとつ寄っていない。机も四つ。そのうちのひとつがパープルの座っている奥の机で、彼女の机の脇にだけは本棚が置いてあった。
どうやら、このパープルという少女は本好きのようだ。そういえば、ナイアル先輩はこの生徒を『文系』と評していた。
大きめの衣装箪笥が二つ。制服が標準の彼女たちだから、二つでも賄えるということなのか、それとも余計なものまで持つなという学校の方針なのか――考えているうちにパープルが書き終えたようだ。
のろのろとだがパープルの脳は現実世界へと復帰を果たし、徐々に焦点の合ってきた瞳でドロシーのほうを見ている。
「どなた……？」
「ドロシーさん」
「どこのドロシーさん？」

「あのねえ！　もう、パープルったら、ほんと書いてるときのあんたって、ロクデナシのデクノボウになっちゃうんだから……」
「うーん。でも、どこかで見たことがある人だっていうのはわかるんだけど」
「あの……リベール通信社のカメラマンをしております、ドロシーです。先日、お写真を撮らせていただきました」
アリスたちを撮った写真を見せる。
ああ、とパープルの顔に理解の色が広がった。
「それにしても、パープルったら、今度は何を書いているのよ。おっかないったら。それに、明りも点けないでやってると目を悪くするわよ？」
「照度と視覚の衰えは関係ないっていう最近の研究もあるけど？」
反論するパープルは、アリスにじろっと睨まれて口をつぐんだ。
「はい。心配かけてごめんなさい」
「わかればいいの」
「小説を書いてらっしゃるんですかぁ？」
ドロシーはとりなすように質問する。
はい、とパープルは言った。
「わたし、小説家になろうと思っているんです。今回は、学園を舞台にした恐怖小説を書いてみようと思って。エイドス様の前で愛を誓ったカップルが校内礼拝堂で悪霊に魅入られて次々と殺されていくっていう……」
「あ、あんたねー。罰当たりにもほどがあるわよ！」
「えっ。そんなことないですよ。現実には起きないと思っているからこそのフィクションですからね。それにこれ、エンターテインメントですし」
言い合うふたりに水を差すように、のほほんとした声が割り込んだ。
「なんだいなんだい。何を揉めてるんだよ？」
振り返ると、いつの間にか部屋の中にもうひとり増えている。
仲良し三人娘の最後の三人目だ。『体育系』の彼女。部活動を終えたところらしく、体操着を着ていて、なぜか肩当てのようなものをつけている。
弓……の武具だったような気もする。
「あ、モニカ！　聞いてよ、またパープルったらロクでもない話を考えてるのよ！」
「ちょっと、ロクでもないとかないでしょ。ホラーを馬鹿にしないで！」
「はいはい。そこまで。お客さんの前でなにやってんのさ」
ハキハキした口調で言った。
赤毛の、背の高い少女だった。後から思えばこのときに気付くべきだった。
モニカと呼ばれた彼女は、口調とは正反対の少し警戒するような目でドロシーを見ていたの

だから……。

モニカに促されてアリスもパープルもドロシーの存在を思い出したようだ。わずかに頬を赤らめつつモニカにドロシーを紹介してくれた。

「へぇ。カメラマンさんか」

「ドロシーさんってばとっても写真が上手なのよ。ほら見てよ。あたしたちだって三割増しくらい美人に写ってるって思わない？」

アリスの言葉にモニカが頷きを返した。

「確かによく撮れてるな」

「上手ですね。こちらの旧校舎なんか、暗く物悲しい雰囲気が良く出ています」

どうやら風景写真の一枚が気に入ったようだ。

†

「今にも隠れている悪霊が姿を現して学園を煉獄へと変えてしまいそうです」

「や、やめてよ！　そういうこと言うの！」

「あー、確かに何か出そうだよな」

「やめてってば！　夜中にトイレに行けなくなったらどうすんのよぉ！」

すっかり涙目でアリスが口をとがらせる。

「あら？　でも、壁に塗り込められた少女の話っていうのは、リベールに伝わる昔の伝説を元にしたのよ？　つまり、実際にあったのかもしれない話なわけ」

「へー、そうなんですかぁ」

とドロシー。すっかり聞き役に回ってしまっていた。

「そうなの。おっかないわよね」

「で、伝説でしょ！　絶対そんなのなかったって！」

どうやら怖がりらしいアリスは手で耳を覆って聞こえないふりをする。

そんなアリスをからかうようにパープルは容赦なく話を続けた。

「もちろんその話は伝説よ。でも、小説は想像だけで書いちゃうと薄っぺらくなっちゃうからね。ホントを混ぜることでフィクションは生きてくるわけ。ほら、ここのくだりだけどさ――」

原稿用紙を叩きながら声を張る。

「やめてぇー、聞きたくないー」

「この前の夜の出来事をそのまま使ってみたのね。夜中に起きたポルターガイスト」

「ぽるたーがいすと？」

思わずドロシーは口を挟んでしまった。面白そうな事件の匂いがする。

「騒々しい幽霊ってこと。家具がガタガタ揺れたり、奇妙な音がしたりするの」

「へー」

「三日前くらいにこの部屋で起こったんです。そのときのアリスったら、もう怯えちゃって怯えちゃって」

「わ、悪いか！」

「かわいいって言ってんのよ。ま、たいていは風の音だったり、家鳴りだったりするんだけど」

「面白いですー」

「面白くない！　ちっとも面白くないってば！　ゆ、ゆうれいなんていないんだからね！」

「えー、でも幽霊は、出たばかりじゃないの。ほら、『白い影』が旧校舎をさ迷っていたっていう」

パープルが言って、ぎくりとアリスが身をすくませた。

すっかり顔が青ざめている。

何かを思い出したように声を出したのはモニカだった。

「そういえば……。ちょうどその頃だね、ドロシーさんがうちの学校に来たのって。ひょっとして取材か何かで？」

「あー、えー、まあ」

「わあ、そうだったんですか！　記者が取材に来るほど有名だったんだ！　じゃあ、あれは本当だったんですね！」

パープルが顔を輝かせて詰め寄ってきた。

反対にアリスのほうはますます顔を青くさせている。

「それで白い影の写真は撮れたんですか！」

「そ、そうですねえ……」

ドロシーは困ってしまった。

いわゆる『白い影』事件については、遊撃士協会から詳しいことは話さないでくれ、と釘を刺されている。あれはどうやら幽霊ではなかったらしいのだけれど、それだけに実は幽霊よりも厄介なことになっている――らしい。

ナイアル先輩も市長選挙が終わったら調べてみたいと言っていたけど。

今はドロシーから言えるようなことは何もないのだ。

「あ、それよりみなさんそろそろお食事なのでは？」

仕方なく話を逸らした。

「いっけない！　もうそんな時間なの!?」

慌てたのはパープルで、「わたし、締切に間に合わないから、ルーアンまで行ってくる」と言って原稿を整えると身支度を始めたのだ。

街から外れた学園には、郵便配達は日に一回しかやってこない。毎日午前に来るそうで。でも原稿の投稿は明日では間に合わないらしい。確かに明日から休日だった。ルーアンの街まで出れば王都への荷は飛行船に乗せられるから速達便を使うなら街に出るしかない。

「こ、これからですか。もう日が沈みますよ」
心配になってしまった。
だが、パープルは友人の馬車に同乗させてもらう予定だとかで、大丈夫だと言った。
「ぎりぎりまで待ってもらってるの。こうしていられないわ。もう出るから！」
そう言い置いて、書き上げた原稿を抱えて部屋から駆け出していった。
「明日には戻るから～～！」
「パープルったら、もう」
週末の外出許可は取ってあるのかしらとアリスが口を尖らせる。
「仕方ないなぁ。モニカ、食堂に行こ。ドロシーさんも」
「あ、はい」
とドロシー。
だが、モニカは、
「悪い。あたしも夕食はパスなんだ」
「えー！」
「アーチェリー部の合宿でね。講堂を使って三日間の泊まり込み。食事も一体感を高めるためとかいってみんなで自炊なんだよ。ああ、風呂だけは寮に入りにくるけどさ。今は着替えを取りに来たところだったんだ」

「そんなっ！　え？　じゃあ、あたし……今夜はひとりきり!?」
「悪いね。でもさ――」
パープルの真似をして、からかうようにモニカが言った。
「アリスはひとりでも平気だろ？　『ゆうれいいなんていないんだからぁ』さ」
「！　！　！」
アリスが声も出せずに口を開けたり閉じたりする。
笑いながら、モニカは着替えを箪笥から引っ張り出す。
「あはは。怖かったら、布団にくるまってさっさと寝ること！　いいね！」
「モニカのばか～～～～～！」
涙の粒を目尻に溜めながらアリスが叫んだ。
そのときにはもうモニカは部屋を出てしまっていて、閉まった扉を前にしてアリスは立ち尽くすだけだった。
くるりと振り返る。
大粒の涙がぽろりと頬を伝って落ちた。ドロシーの心臓がどきりと跳ねる。
――ああ、どうしましょう！　こんな可愛い子を泣かせてしまいました。いえ、泣かせたのは自分ではないのですけれど。
動転しているドロシーに向かってアリスが言った。

「おねえさま、お願いします。今夜はいっしょに寝てください！」

……はいい？

†

夕映えが白い外壁を赤く染めている。
ジェニス王立学園の女子寮を見上げながら、ドロシーはため息をついた。
——どうしてこうなったんでしょう？
玄関を抜け、一階の端の部屋へと辿りつく。扉を開けると、アリスが期待に目を輝かせて待っていた。
「ど、どうでした⁉」
「許可していただきました。部屋が空いているなら構わない、と。宿直室にでも泊めてもらえれば、というつもりだったのですが」
「そんなっ。ドロシーさんは、学園のために写真を届けに来てくれたんでしょう」
「いえいえ。個人的なお願いでしたし」
リベール通信社とも学園とも関係なく、取材写真を撮る傍ら、食堂のデボラと私的に交わし

た約束なのだ。
「そうなんですか？　でも、よかった！」
言いながら、ベッドの上で座ったままアリスがぽんぽんと跳ねる。
純粋に喜んでいる彼女の顔を見て、まあいいかとドロシーは思い直した。好奇心が疼いているのも確かだ。
「それで、先ほどのお話なのですけれど……」
ドロシーの言葉にアリスの顔から笑みが消えた。頬を引きつらせる。アリスの怖がりは本物のようだ。誰もいないのに左右を見回してから話し始める。
「ええと……。一週間ほど前からなんですけど……。真夜中頃です。家具がガタガタと鳴ったり、足音みたいなのが聞こえたり……」
「それは、他の部屋でも？」
「物音を聞いたっていう子はけっこういます！」
「それで……幽霊だと」
「パープルが、ポルターガイストじゃないかって言い出して」
ポルターガイスト——騒霊現象というのは、心霊現象のひとつで、誰もいないのに物が動いたり、音が聞こえたりすることがうれしかった。怖がりのくせにアリスは詳しく教えてくれたのだ。幽霊の仕業ということになっているらしい。

「パープルってば、最近、自分がホラー小説に凝ってるものだからってもう！　きっと風の音とかに決まってるんですよ！」
「本当に？」
　ドロシーの問いに、うっ、とアリスは言葉に詰まった。
　泣きそうな顔になったアリスを見て、ドロシーは頭を掻く。しまった、これは言いすぎだ、と反省する。怖がらせるつもりはなかったのだが……。ドロシーとしては幽霊がいるならば、ぜひ見てみたい、できれば写真に収めたいと思っているわけで――。
　ひとまず話題を変える。
「パープルさんは作家志望なんでしたっけ？」
「そうみたいです。あたしたち三人って、ばらばらなんですよね」
　その言葉はは前に彼女たちの写真を撮ったときにも聞いた気がする。
　アリス、パープル、モニカの三人組は、それぞれ異なる方向に個性的な生徒たちだった。お洒落系、文系、体育系。
　可愛い物好きらしいアリスがお洒落系というわけだ。先ほど原稿を投稿しに街へと向かったパープルが文系少女。
　部活で合宿中だと言った活発そうな女の子が体育系のモニカだ。
「パープルって、執筆に入ると、周りが見えなくなるんですよ」

「あー」
　身に覚えがありすぎる。ドロシーも、おまえはカメラを構えると周りが見えなくなる、とナイアルから始終言われている。急に親近感を覚えてしまった。
「街にあのまま行っちゃったけど、履いてた靴下の柄が昨日とおんなじだってこと気づいてるのかしら」
「ははは……」
　アリスは同じ柄の靴下を連続して履くことに抵抗があるらしい。
「こ、細かいですねー」
「あったりまえじゃないですかー！」
「だって、この学園って制服ですよね……」
「だからこそ、小物に拘るんです！」
　しまった。なにかボタンを押してしまったらしい。
　そこから十五分ほど、みなと同じ制服を着つつ、どうやって差別化してお洒落するかについて延々とまくしたてられ、そのことに気づいてくれないルームメイトへの繰り言がさらに十五分続き、気づいたときにはもう夕食の時間。
　食堂で夕食を済ませて寮に戻ってきたときには、すっかり夜だった。

†

真っ黒な闇の帳が窓の外に降りている。
ベッドに腰掛け、ドロシーはアリスと向かい合って、寮の話などを聞かせてもらっていた。
寮生活の経験がないドロシーには興味深いことばかり。
「面白いです～。あと、さっきから、パープルさんとモニカさんのお話ばかりですね」
何気なく口にしていた。
「えっ？　そ、そうかなぁ」
「はい。『パープルったら』とか『モニカはね』とか」
「それはその……同室だし」
「それもあるのでしょうけれど」
ドロシーは微笑んだ。
「大好きなんですねー、おふたりのことが」
アリスの顔が真っ赤になった。
そのときだ。
ガタッ、と物音が聞こえた。
はっとなったアリスの顔がはっとなる。視線を追ってドロシーは顔を巡らせた。部屋の隅にある衣装箪笥に目が向く。
そちらから聞こえたっぽい。
息を殺してじっと見つめていたけれど、物音は一度きりで収まってしまった。
「ド、ドロシーさん……」
「はい」
「今の、聞こえました？」
「……一応」
顔をそむけたままアリスが答える。意地でも見ないぞと言わんばかり。
まさか本当にポルターガイスト？　でもまだ真夜中にはほど遠い。幽霊が出るには、早すぎないか？
けれど、一度疑ってしまうと、室内導力灯（ルームライト）の影に何かが潜んでいる気がしてしまう。
思い切って立ち上がる。四人部屋の隅に置かれた箪笥のほうへと歩き出そうとして気づいた。
――えっ？
ドロシーの巡らせた思考を断ち切るように、ノックの音が響いた。
「入るよ」
声とともに体操着に上着を羽織っただけの少女が入ってくる。モニカだ。
「風呂の時間だよ、おふたりさん！」

言って、自分のものらしきベッドの上にどかっと胡坐を掻く。そういえば、お風呂は入りにくるとか言ってたっけ。
「ちょっとモニカってば。お行儀が悪いよ。ドロシーさんが呆れてるじゃないの」
「いえそんな……」
ドロシーは呆れてはいない。驚いただけだ。
「いいじゃんか、別に。あたしたちだけなんだし」
「あたしたちが見てるでしょ！」
「アリスに見られても別に。減るもんじゃないからいいと思うけど」
「あたしが恥ずかしいの！　もう！」
まあまあとドロシーがなだめる。
「それより、わたしも、お風呂をいただいてしまって良いんでしょうか？」
言ったら、アリスが目を剥いた。
まさか入らないつもりなのかと尋ねてくるので、一日くらいは我慢すると返したら、すごい勢いで腕を掴まれた。
「すぐに行きましょう、ドロシーさん！　お姉さまが汚いままなんてあたし我慢できない！」
アリスの言葉にモニカががりがりと頭を掻きながら言う。
「女子が汚い恰好で存在するのが女子寮ってもんじゃないのか？」

「そんな伝統はあたしの代で駆逐してやるわ！」
「はいはい」
「モニカにも言ってるの！　さっさと、その汗まみれの服をどうにかしなさいよ！」
言われて、モニカが自分の身体に視線を落とす。そうかなー、そんなに汚いかなー、と首を捻っている。
「あの……でしたら、みなで一緒に行くというのは？　あっ、入れるかどうかわかりませんけど」
「それは大丈夫です。四人いっぺんに部屋ごとに入れるようになってるから」
「あ、なるほど」
寮は最大が四人部屋だと言っていたっけ。
「ほら、モニカも行こうよ」
「あたしは後から行くよ。先に行ってて」
そう言って、ごろりとベッドに横になってしまう。アリスがまた目を吊り上げた。
視線から逃れるようにモニカが背中を向けた。
「えっとその……。では、先にいただいてしまいましょう」
「でも、ドロシーさん……」
「ほらほら。案内していただけますか？」
アリスの背中を押す。

部屋を出るときに、ちらりとドロシーは衣装箪笥に視線を走らせた。
それから寮の長い廊下を歩いて浴場へ。
歩いている途中ですれちがったメガネの生徒が、わたしも一緒にと合流した。この子は確か、とドロシーは記憶を浚う。
生徒会長のはずだ。名前はジル。
「あんたたち三人部屋でしょ。じゃ、いいよね！」とにっこり。
同室だという生徒が不在らしく、ひとりきりで入る予定だったとのこと。
男子寮と女子寮にそれぞれ存在するという浴場は、四人が入っても余るほどの大きなもので、まるで温泉に来たかのようだった。
「温泉いいですねー。行きたいなぁ」
一瞬で脱いで湯船に浸かった生徒会長が、はあと息を吐きだしながら言った。メガネが曇った。お風呂に入るときまでかけてるらしい。
「会長、おじさんみたいですよー」
「むっ。アリスさんってば、あなた、若き乙女に対してなんと失礼な！　……と、ところで聞きそびれてたんだけど、そちらの胸の大きいお客様って、前に学園の『白い影』事件のときに訪れた……」
「はい。リベール通信のドロシーです。お、大きくはないですよぅ」

じっと視線を注がれて、ドロシーは湯船に身体を沈めた。
「お姉さまって着やせするんですね！」
「ア、アリスさんまで」
「うう……。うらやましい」
「あるところにはあるってものなのね……」
うらやましげな視線を投げられ、なぜかツァイスの温泉に若い遊撃士の少女と入ったときのことを思い出してしまった。
「お、おふたりはこれからじゃないですかぁ！」
「どうしたらそんなになるんですか」
アリスに真面目な顔で聞かれてしまったので、真面目に考えた。
「そうですねぇ。湯上りにフルーツ牛乳を飲む、とか」
この話はあまり続けたくないので、ドロシーは話題を変えることにする。
「あの……ところでですね。お部屋のふたつの衣装箪笥って、アリスさんたち三人で使っているんですよね？」
アリスが頷いた。
「奥のやつがモニカとパープルので、手前があたしのです」
予想通りの答えが返ってきた。

「アリスさんはひとりで一個使ってるんですねー」
「モニカとパープルがそれでいいって。あのふたり、自分たちはそんなに服を持ってないからって」
なるほど、とドロシーは頷く。
ふたりともこう言ってはなんだけれど、確かに服に気をつかうタイプには見えなかった。つまり、あの奥の箪笥は――物音が聞こえたほうだ――モニカとパープルの共用箪笥だったわけだ。
そして、先ほどアリスは言っていた。
執筆に入ると、パープルは周りが目に入らなくなる、と。
「そうそう。そのモニカさんなんだけど、近頃、どう?」
何気ない口調で切り出したのはジルだ。
「モニカが何か?」
「んー。いや別に何もなければいいの。ただ……彼女、最近、ちょっと部活をサボリがちらしいのよね。そのへんを、アーチェリー部の部長に言われてさー」

「えー!? だってあの子、毎日部活に出てますよ。今日だって合宿にちゃんと参加してたし」
「そ? それならいいんだ」
そう言って、生徒会長は気にしないでと話を切り上げた。
――ひょっとして……。
ジルはこの件を切り出すために、お風呂に割り込んできたんじゃないかな、とドロシーは気づいた。たまたますれちがった風を装っていたけれど。
メガネを曇らせたジルの表情は読めない。
けれど、たぶん間違いない。どうやらジェニス王立学園の生徒会長は気配りの利く、やり手のようだとドロシーは思った。
そのあとは他愛無い会話が続いた。女三人寄ればというが、話はあっちにいったり、こっちにいったりを繰り返し、いい加減に出なさいと後続の生徒に促されてようやく風呂をあがった。
いいお風呂だった。湯上りにフルーツ牛乳がないのが惜しい。
モニカは浴場に姿を見せず、部屋に帰ってもいなかった。合宿所に戻ったのだろうとアリスが言う。お風呂に入らない気かしらと憤慨していた。
ドロシーは、ちらりと部屋の隅の衣装箪笥に視線を投げる。
こうしてみると、けっこう大きい。そう……何かを仕舞い込んでおくには充分なほどの大きさがある。

開けてみればはっきりするけれど――おそらくもう……。
「ドロシーさん、あの……」
寝間着に着替えたアリスが心細そうな顔をする。部屋に戻ってきてポルターガイスト騒ぎを思い出したのだろう。アリスの服は、可愛らしいお菓子がいっぱい散らばった柄だった。服の裾を握りしめながら、ちょっと青い顔をしている。
「大丈夫ですよ。今夜はたぶん幽霊さんは来ないと思います」
「えっ……」
きっぱりと言ったドロシーにアリスが不思議そうな顔をする。
夜更けまでたっぷりとおしゃべりをして、いつの間にかふたりとも寝てしまった。
その夜はそれから物音ひとつ聞こえず。
ふたりとも夜更かしがたたって、昼ごろになるまで目が覚めなかった。
あくる日――休日の朝、というかもう昼だったけれど。ジェニス王立学園内には、ちょっとした騒ぎが持ち上がっていた。
旧校舎の一部が壊されるという事件が起こったのだ。

†

食堂で遅すぎる朝食を食べていると、ルーアンの街からパープルが帰ってきた。
「あんたたち、まだお昼、食べてなかったの？」
「ちがうわよ」
アリスが言った。
「これ、朝食だもん」
呆れ顔になったパープルがアリスの隣に腰を下ろす。
「ま、いいけどさ」
「間に合ったの？」
「一応ね。世紀の傑作よ。『王立学園に潜む魔獣ウーライ・バーチャの復讐は血の惨劇の夢を見るか？』っていう、痛快ホラー青春アクションなの」
アリスもドロシーも言葉を失った。
「そ、そうなの？」
「スゴイデスネー」
とだけ返す。
「エンターテインメントに徹したわ。イマドキ、暗くて陰気な作品なんて、誰も読まないと思うのよね！」
充分、暗くて陰気なタイトルに思える――とは言いだせなかった。

きっと本人の中では明るく楽しい痛快アクションなんだろう。
　想像もできないけれど。
「このために遊撃士の魔獣手帳と遊撃士（ブレイサー）手帳と釣り手帳を写させてもらって読み込んだの！　資料集めから勝負は始まるのよねー」
「釣り手帳って読む意味あるの？」
「リアリティってやつよ！」
　アリスが納得いかないという顔になった。ドロシーも同じ気持ちだが、まあ、作家の頭の中なんてどこでどう繋がっているのかわからないし。そういえば、ナイアル先輩も役に立つのか立たないのか不明な本をよく読んでたっけ。『子育て上手のママになる方法』とか。ナイアル先輩にもっとも縁のなさそうな……。
「ところで、何かあったの？」
　食堂のあちこちでひそひそと噂話が繰り広げられている。周りを見回しながら、パープルが少しだけ声を潜めて言った。
「旧校舎がまた立ち入り禁止になるかもって」
「あら」
「旧校舎って、あの、柵の向こう側の建物ですよね？」
　ドロシーが尋ねると、アリスもパープルも頷いた。

　ジェニス王立学園の敷地の東側には、張り巡らされた囲いの向こうに古ぼけた校舎が建っている。今の校舎ができる前に使われていたものだ。老朽化してしまい、魔獣が棲みついたりなどもあって、危ないからと立ち入り禁止になっていた。
　ドロシーが前に学園を訪れたときは、幽霊が現れるというので出入りできる扉には鍵が掛けられていた。
「遊撃士さんが退治してくれたから危険はなくなったはずなんだけどなー」
「何かあったの？」
　パープルに問われて、アリスが答える。
「旧校舎の裏庭に面した窓の一部が壊されてたんだって」
　ドロシーもアリスも先ほど知ったばかりだ。食堂に来て、ざわついている人たちに訊いて教えてもらった。
　鍵が新調され、当直の守衛を雇うことも検討しているらしい。
「また、何か出たのかな？」
　パープルが言って、アリスの顔が引きつった。
「ちょっとやめてよ。せっかく寮に出なくなったと思ったのに」
「出なかったの？」
「久々にぐっすり眠れた」

「それで今頃になって朝ごはんなのか。そういえば、ドロシーさん、泊ってたんですね」
「はい。大きなお風呂も堪能させていただきました～」
「別に一晩じゃなくても、ずーーーっと泊ってくれてもいいですよ！」
「まあ……。ああでも、できればもう一日泊めてもらえればって……よろしいでしょうか」
ぱああっとアリスの顔が明るくなった。やはりまだ心細かったのだろう。
「無理を言うんじゃないわよ、アリス。ほら、ドロシーさんだって困ってるじゃないの」
「まだお仕事が？」
パープルが言った。
「それもあるんですけど……」
昨日も今日も色々あって、食堂メニューに使う写真をまだ選んでもらっていない。
けれど、それだけではなかった。
「ポルターガイストなんですけど――」
ぎくり、とアリスが身をすくめる。
「たぶん、今夜には片がつくと思うんですよぅ」
「片がつく？」
「はいー。ところでパープルさん。小説家に大事なことってなんだと思いますか」
「観察……かしら」

「ですよねー。じゃあ、今夜、肝試しをしませんか？」
パープルが好奇心満々の顔つきになり、アリスが顔を引きつらせた。

†

その日のドロシーは忙しかった。
まずは食堂のデボラに相談して、メニューに使う写真を選んでもらった。
食堂には前回からのわずかな時間で新しいスイーツが増えていたけれど、パンプキンパイは甘すぎ、シナモンティーは癖が強すぎると、男子生徒たちからは不評らしい。メニューに加わるかどうかは微妙なところだ。
それから、ルーアンの街に滞在するナイアル先輩へと連絡を取る。学園のオーバル通信機を使用させてもらって、ホテルへ繋げた。帰るのが一日遅れてしまうから心配かけるとまずい。
驚いたことに、折り返しですぐに連絡が入った。手渡された通信文を読む。
『オマエガ珍シク気ヲ回シタノガ心配ダ。雨デモ降ルンダジャネエカ？』
と、書いてあった。
「……何でしょう。この言いようのない脱力感は」
心配するかもと思ったのは確かだが、こういう心配をされたかったわけではない。

「いや、絶対これ、心配してないですよねー」
思わず独りごちた。
それから、学園内のあちこちをカメラ片手に見て回る。
こういうときカメラマンは得だ。カメラを手にしていればうろついていても怪しくない。
旧校舎へと繋がる扉は確かに鍵が新調されていた。金属製の柵で取り囲まれた敷地内にあるから、誰も入れない。
というわけでもない。もし、本当に誰も入れないなら、魔獣が棲みつくこともなかったはずなのだ。裏手は森になっているから、どこか柵が壊れているのかもしれない。あるいは地下で繋がっているか。
そのことを相談に学園長室も訪れた。ジェニス王立学園のコリンズ学園長は穏やかなおじいさんで、このままトンガリ帽子をかぶせればおとぎ話の魔法使いか賢者になれそうな人だった。突然の来訪者なのに温かく迎えてくれる。
「なるほどのぉ。確かにそこまで点検はしておりませなんだが……」
「危ないです」
「だが、そもそも夜に学園の外に出る生徒はおらんのです」
あ、なるほど、と思い至る。学園の外は魔獣のうろつく森だ。遊撃士でもなければ、夜に出歩こうと思わない。

「でも、昼は外まで出ますよね？　運動部とか……アーチェリー部、とか」
「鍛錬のために森を走ったりしているようですな。だが、それも決められた安全なコースを走るようにと言い聞かせてありますよ」
ドロシーの不安そうな表情を読み取ったのだろう、コリンズ学園長がつけ足した。
「だが……やんちゃ者はどこにでもおりますからな。わかりました。これを機会に、旧校舎の周りの柵は今一度点検することにしましょう」
縁もゆかりもない一介の通信社のカメラマンの言葉を真摯に聞いてくれるのだから、この学園長さまって良い人だー、とドロシーは思った。
それからひととおり学園内を見てまわる。
休日だけあって園内には人がやや少ない。実家に帰っている生徒も多いからだ。それでも運動部系の部活はいつもどおり、よく聞き取れない掛け声を張り上げている。いつも思うが、あれは何の意味があるんだろうか。学生時代に運動とは縁がなかったドロシーには永遠の謎だ。
先生たちの多くは学園内に住んでいて、溜まった仕事を片づけていた。テストの採点だったり、部活の指導だったり、授業のための資料作りだったり。休日だというのに休んでいない。先生という仕事も大変だ。
学園祭で生徒会が劇を披露するのに使用されたという講堂も寄った。大きな箱型の仕切りのない造りで、床は板張り、正面にステージがある。今は女子の一団がダンスの練習をしていた。

あのステージに立って、エステルちゃんとヨシュア君が劇をしたわけだ。エステルは騎士の役を、ヨシュアは王女の役だったという。
『本物のお姫様みたいってすごい評判だったのよ！』
というのは、前回来たときに同行していた遊撃士エステルの言葉だ。
千載一遇のシャッターチャンスを逃したのが悔しい。
ナイアル先輩はばっちり見たという話なのに。
講堂の片隅を見ると、寝袋が山になっていた。合宿をしているというアーチェリー部のものだろう。モニカはいなかった。そもそもアーチェリー部の生徒たちの姿がない。どうやら別の場所で修練に励んでいるようだ。そういえば弓を引く専用場ってどこかにあるんだろうか？もしかして、森のほうにあるのかもしれない。
結局、モニカとは会えずじまいで寮に戻る。
空がふたたび茜色に染まっていた。もうじき日が暮れる。黒々とした翼の鳥が一羽、西に向かって飛んでいった。
部屋に戻ると、アリスとパープルが向かい合って話し込んでいた。
ドロシーを見て、ふたりとも身体を向けてくる。
「あ、ドロシーさんっ」
「あの……これ」

パープルが視線を箪笥に走らせながら手を差し出してくる。その手に握られているのは、ぼろぼろになった小汚い毛布だった。
「これは……？」
「言われたとおりに、その箪笥を漁ったら……」
パープルが言った。
「やはりそうでしたかー」
ふたつある箪笥のうち、奥の箪笥の下の段。つまり、モニカとパープルが使っているほうのモニカのほうから見つかったのだろう。
「幽霊……じゃなかったんですか？」
「そうですねぇ」
ドロシーは自分の推理を話して聞かせることにした。
初めに気づいたのは、最初にポルターガイストらしき物音がしたときだ。奥の箪笥を見て、ひとつの段を除いて、服がはみ出しそうになっていた。
「モニカってば、いっつもそうなんですよー。ちゃんとしまえって言ってるのに」
アリスの言葉に、ドロシーは思わず苦笑いをしてしまう。そういう意味で言ったのではないのだけれど。
「失礼ですけれど、アリスさんに比べれば、モニカさんもパープルさんも、あまり服はもって

いらっしゃらないんでしょう?」
「それはまあ……制服があるから」
「ですよねー」
なのに、はみだしそうになっていた。つまり、これは箪笥の中のものを無理に移動させたか
らではないのか?
おそらくですけれどぉ、と前置きしてから言う。
「モニカさんは部活中に子犬か子猫でも拾ったのではないでしょーか」
ふたりともが驚いた顔になる。
「まさか、ここで飼ってたっていうんですか」
パープルが首を捻る。
「はい」
「家具が鳴ったりとかの夜中の騒音はその拾った子が立てた音だと?」
「そうなりますね」
「それは、いくらなんでも気づくような……」
パープルが言って、ドロシーは首を横に振る。
「そうでしょうか? パープルさんは数日前から原稿を書いてたんですよね? 執筆中は周り
がまったく見えなくなるって聞きました。事実、わたしたちが最初、部屋に入ってきたときも

そうでしたよ」
「うっ」
「でも、あたしもいたのに」
「アリスさんは本当だったら気づけたはずです。けれど、昨夜もそうでしたけれど、音がした
とき、怖がって、絶対に音のほうを見なかった」
「あ」
ふたりともが絶句した。
「でも、それなら言ってくれればいいのに」
「おふたりに迷惑を掛けたくなかったんだと思います」
寮は原則ペット禁止なのだそうだ。バレれば同室のふたりにも責が及ぶ。
「子犬か子猫だろうって思うのは、モニカさんがしばしば部活を抜け出していたからです。そ
れだけ世話が必要だったんだろうなって。もしかしたら、ケガをしていたのかもしれません」
だが、この休日を利用してアーチェリー部は合宿を行うことになった。
しばらく寮に帰れなくなる。
そこであの日——ドロシーがやってきた日だ——モニカは拾った猫だか犬だかの隠し場所を
変えることにしたのだ。
「じゃ、じゃあ、モニカがお風呂を入りにきたとき……」

「はい。まだ箪笥の中にその子は隠れてたんだと思います。わたしたちをお風呂に追いやっておいて、こっそりと連れていった……」
それでモニカがお風呂に来なかったのも納得がいく。
ドロシーの説明に、アリスもパープルも聞き入っていた。
「じゃ、じゃあ、モニカが拾ったっていうその子は、今はどこに——」
「それも見当がついています」
ドロシーはにっこりとほほ笑んだ。
「だから言ったんですよ、肝試しをしましょうって」

†

月だけが夜空に輝いている。
黒い影がひとつ、鋼鉄製の柵に駆け寄った。
身長よりもわずかに高い鉄の棒へと飛びつくと、足がかりもないのに柵を蹴って自分の身体を持ちあげた。尖った天辺で身体を傷つけないよう身体をひねって飛び越える。
背中には部活で使った弓が背負われたままだった。
モニカだ。

旧校舎へと振り返らずに走ってゆく。
しばらくして隠れていた茂みの中からドロシーたちは姿を現した。
「あの子ったら、部活の道具を置いてくるくらいできなかったのかしら」
アリスが言った。
「それだけ心配なんでしょうね。しかし、鍵をつけたくらいじゃ防げないもんですねー」
モニカの運動能力に、ドロシーは感心してしまう。
「あたしたちはどうするんですか。あの子のマネは無理ですよ」
パープルが心配そうな目をモニカの消えたほうに向けながら言った。
「鍵を借りてあります」
ポケットから鍵を出した。かちゃっという鍵の開く音が夜の中に響く。鉄の柵は握りしめると冷たかった。
開ける。
ドロシーたちはゆっくりと旧校舎へと向かって歩いてゆく。
旧校舎の敷地内にはロクに導力灯も点いておらず、まったくの闇がそこここにわだかまっている。ドロシーはわくわくするが、アリスには少々辛いようだ。さっきからパープルの服の裾を掴んだまま離さない。
「ひょっとして旧校舎の窓が割れたのって……」

「モニカさんが割ったとは限りませんが、状況的に何か関連はありそうです」
裏庭のほうへと回ると、確かに窓がひとつ割れている。さらにその窓は開けたままになっていた。無理をすればそこから入れそうだ。
「こ、ここから入るんですか？」
アリスはすっかり怯えた顔になっている。元々、あまり怖いものが好きではないようだし、夜の旧校舎というだけで嫌なのだろう。それに加えてあまり運動も得意ではない。
無理をせずに待っていてくれてもよかったのだが。
「い、いえ。行きます。やれと言われれば、よじのぼるくらい。こ、これくらい！」
「正面の鍵も預かってますので、そっちから入りましょう」
あっさり言ったら、拍子抜けした顔になってへたりこんだ。腕を掴んでパープルが引っ張りあげる。
「ふえぇぇ」
「まったく、世話の焼ける……」
「パープルってば怖くないの」
「魔獣は怖いけど、幽霊は別に。だって、元人間なんでしょ。じゃ、夜道で酔っ払いに絡まれる怖さと似たようなもんだと思うし。確実に厄介な酔っ払いに比べれば、害があるとは限らない幽霊のほうが……まし、でしょ」

パープルの斬新な意見にアリスが目を剥いた。
「だってもう死んでるのよ！」
「そりゃ、誰でも一度は死ぬわよ。あれ？　でもそーなると幽霊が成仏するって、二度死ぬことになるのかな？　それは滅多にできない経験だわ。あたしも死ぬときは一度は幽霊になってから死にたいかも」
「ぱーぷるってば〜〜〜〜やめてよ〜〜〜〜〜」
アリスが涙目になった。
「あの……もうちょっとお静かに」
いつもナイアル先輩に言われている台詞を自分が言うことになろうとは思わなかった。
ともあれ、それでふたりともがぴたりと口をつぐむ。
正面玄関に廻り、鍵を開ける。
錆びついた音を立てて扉が開いた。
玄関ホールを抜けて、南側の廊下へと出る。その先に中庭へと続くテラスがあるはずだった。
南側から差し込む月の光に照らされて、廊下が青白く輝いている。
数えてふたつめの扉が細く開いていていた。
あそこにいる。ドロシーの直感が告げていた。
と、そのときだ。

それまでの静けさを破って慌てた声が聞こえた。「ばか、こら待て！」という叫びの直後に、ドゴン、と派手な音を立てて扉が粉砕される。破片を廊下に撒き散らしながら、そいつが飛び出してきた。
「きゃああ！」
たまらずにアリスが悲鳴をあげてしゃがみこむ。
廊下に後を追って飛び出してきたモニカが、びっくりした顔になって振り返った。
「えっ……アリス？」
「あたしもいるわよ」
パープルが腰に手を当てたまま言った。
ルームメイトたちの邂逅をしり目に、教室の扉をぶちやぶったそいつは、鼻を鳴らしながら、ドロシーと見つめ合った。小さいながらも、身体の毛を逆立てて、ドロシーを威嚇しようとしている。
ドロシーは己の間違いを悟った。なんてことだろう。
モニカが拾ったのは、子猫でも子犬でもなかった。
魔獣だったのだ。

†

とりあえず壊れた扉はそのままに、ドロシーたちは教室へと入る。
魔獣の子どもはモニカが抱えていた。ミルクを飲ませると、あっという間に寝てしまった。今は目を閉じてすやすやと寝息を立てている。後ろ脚の片方とお腹に包帯がぐるぐる巻かれていた。
森をランニング中に拾ったのだ、とモニカが言った。
「ま、魔獣だよ⁉」
「でも、放っておけなかったんだよ！」
ケガをしたらしく、死にかけていたのだと言った。拾った直後はほとんど身動きもしなかった。わずかなミルクだけを飲んでずっと寝ていたらしい。
「ミルク……？　って、ひょっとして食堂のミルクですか？」
ドロシーの問いにモニカが答える。
「うん。ただ、目を覚ますと、こいつ意外と大食いでさーだから食堂のおばちゃんにかけあって……」
なるほど。それで売り切れてたのか。
「水くさいんだから！　わかってたら、協力してあげたのに」
アリスが言った。

「でも、寮は動物飼うの禁止だしさ……。ばれたら、みんなにも迷惑かけるかなって」
「あたしたち、友達じゃないの！」
「ま、どのみち、あたしは締切明けるまでは何もできなかったと思うけどね」
「……パ、パープルってば！」
アリスが火を噴くような目で睨む。パープルが肩をすくめた。それを見て、モニカがやれやれと苦笑を浮かべる。
ああ、この三人はいつもこうなんだろうな。そう思える瞬間だった。
アリスとパープルはしばらく言い合っていたが、モニカがなだめてようやく話が元に戻った。
モニカは、拾った動物が魔獣だということは見当がついたが、どんな魔獣かまではわからなかった。
「コウリボア……」
パープルが言った。
「ウリボー……なんだって？」
「こうりぼあー、よ、アリス。ウリボアの子どもだって言われてるの。後先考えないで突っ走ることを『ウリボアの突進』って言うでしょ。遊撃士も手を焼く厄介な魔獣ね」
壊れた扉を見ながらパープルが言った。
「ずいぶん元気になってるみたいじゃないの」

「昨日くらいからだよ。元気になるとじっとしてられないらしくってさ」
寝入っているコウリボアを撫でながらモニカが言った。
犬よりもコロコロしていて豚に似ていた。毛皮に縦縞が入っている。脚を縮めて丸まっていると、なんとなく瓜を思わせる身体つきだった。なるほど――だから瓜なんとかって名前なんでしょうか。それとも偶然？
「まさか、窓を壊したのもこの子ですか？」
ふと思いついて聞いてみたのだが、モニカが頷きを返した。昨夜、コウリボアを寮からこの旧校舎に連れてきたときに腕から逃げ出して割ってしまったらしい。
「まあ、だいぶよくなったからさ。もう、森に帰さなくちゃいけないのかなって……」
少しさみしそうに言った。
「そっか……」
アリスも神妙な顔になった。
鍵も新調され、見張りもつくかもしれないとあっては、そうそう旧校舎に忍び込むこともできなくなる。それに、そもそも野生の魔獣なのだ。あまり人間の手に馴染むのもよくないかもしれない。
「だからお姉さん、今夜には片がつくって言ってたんですね」
パープルが言った――正解。

「休日も終わりますから」
　明日からは日常が戻ってくる。寝入っているウリウリした坊やを見つめていた。
　なんとなくみんな黙ってしまって、
　月の影がゆっくりと動いてゆく。
　壊れた扉越しに差し込む明りがのろのろと瓜坊やを抱いたモニカの足下から這い登ってくる。寝ている魔獣の顔を照らした。まぶしさに目をしばたたかせ目を開ける。ゴヒッ？　とモニカを見上げて啼いた。くすりと抱きかかえたモニカが微笑む。
「よし。森に帰ろうな」
　言い聞かせた。自分に、かもしれない。
「いいの？」
　とアリス。
「いいんだ」
「じゃ、行きましょ。そろそろ寒くなってきたわ」
　二の腕をさすりながらパープルが言った。そっけなく現実的な言い回しが、この子が自分に割り振った役割なのだろう。
　一瞬むっとした顔になったアリスだが、ぷいと顔を逸らして言う。
「わ、わかってるわよ！」

　それを見て、パープルが微笑む。
　友達っていいものだな〜、とドロシーは思った。カメラに夢中だったドロシーは学生時代にひとりでいることが多かった。それはそれで後悔していないが、それでも――。
　友達っていいものだ。
　なぜか、遠い街で待っている小言の多い先輩の顔が浮かんだ。
　壊れた扉に応急の修理（椅子と机でバリケードを作った。魔獣が棲みついては困る）をほどこしてから廊下に出た。
「中庭の端に柵が壊れてるところがあるんだ。そこから森に出られる」
　運動部員たちの間では有名な話らしい。
　ときどきサボるために使っている、と言われて、ドロシーは苦笑してしまう。名門ジェニス王立学園の生徒も、やっぱりふつうの学生だったというわけだ。
　廊下から中庭へと出ようと歩き始めたところでそれが起こった。
　翼の羽ばたく音が聞こえて、天井から何かがぶつかってきたのだ。
「うわあ！」
　モニカが悲鳴をあげて倒れる。コウリボアが腕からこぼれた。
「な、なに!?」
「ボールバット！」

パープルが息を呑んだ。

蝙蝠に似た、だが、ほとんど球形の身体をもつ翼ある怪物は、ふたたび天井付近まで舞い上がって、そこで翼を振って留まっている。

これは確か旧校舎の地下にいた魔獣だ。

エステルたちがここの地下を探索したときにはついていけなかったドロシーだが、そこで何が起こったのかはだいたい聞いている。

†

「地下の魔獣はぜんぶ倒してきたって聞いていたのですけれど……」

だからこそ、ここまでこれたわけで。あまりに遅くなったときの言づけはしてきたものの、ここで魔獣と遭遇するとは計算外だ。

決して強くはない。

その証拠に、ドロシーたちの人数を見て、相手は警戒しているようだ。

一対四。数の上では不利だと思っているのだろう。

ボールバットの顔がドロシーたちを順に見回している。ドロシーを、モニカを、パープルをアリスを見て、それから一点で視線が止まった。目で見ているのどうかはわからないが、少なくとも顔が向いた。

そこに、小さな手負いの獣がいる。

ボールバットは狙いを定めた。

金物を引き裂くような不快な声をあげ、翼を強く打ち振って飛びかかってくる。

コウリボアを狙って。

かばうように人影が動いて、間一髪でウリ坊やをさらって廊下を転がった。

「アリス！」

動いたのは一番近くにいたアリスだった。転がった拍子に膝を打ったらしく顔をしかめている。しかも、頬にすり傷が走って、血が滲んでいた。

「ば、ばか、なにやってんだよ、アリス！」

モニカが慌てて駆け寄る。

「だって――」

包帯を巻いたコウリボアを抱きしめながらアリスが言う。

「この子せっかく助けたんでしょ！　き、傷ついたら、モニカ悲しむじゃないの！」

「そりゃそうだ」

パープルが相変わらずの飄々とした言い回しで肩をすくめる。

「けど、アリスが傷ついても、モニカは悲しむと思うよ」

「！　あ……」
泣きながら見上げるアリスの目を見て、モニカが頷いた。
「うん」
「ごめん……」
いい場面だが、あえてドロシーは口を挟む。ここでドロシーまで感激していては、誰も助からなくなってしまう。
「あのー。それで我々が助かるためにですねー」
急襲に失敗したボールバットが天井付近で次の手を練っている。今はこちらの手番らしいから、早急に対処法をとる必要があった。
「なにか、あのボールバットについて情報をお持ちではないでしょうか、魔獣手帳を読破したパープルさん」
精一杯、場をなごませる口調で言ってみたが、よく考えてみると、ナイアル先輩だったら、なごんでいる場合か、と叱りそうだ。
一瞬だけ目を瞑ったパープルが、目を開いてから「確か、暗所を好む、とあったような」と言った。
——暗所を好む。
——ということは、明るいところは苦手、ということでしょうか。

なるほど、それで月明かりさえ避けて、天井の暗がりに逃げるわけか。
「充分です。では、逃げましょう」
三人に中庭の出口へと向かって走るように促す。
「で、でもドロシーさん」
「わたしは最後から行きますから、みなさん合図したら走ってください。いいですね。３、２、１、ゼロですよー！　ほらほら！」
コウリボアを抱えた三人が走り出した。逃がすまいと、天井からボールバットが襲いかかってくる。ドロシーは魔獣の前に立ちはだかり、ポシェットからカメラを抜き取った。
ボタン操作なんて見なくてもわかる。
オーバルカメラの操作盤である導力器を指でなぞり、一瞬で魔法を起動させる。
構えてシャッターを切った。
夜を昼に変える閃光が、愛用のカメラから迸る。
魔獣の影が長く天井に向かって伸びた。
ギャアアアアア！
ボールバットが絶叫をあげた。だが、それでもそいつはドロシーに向かって飛びかかってきたのだ。尖った爪がドロシーの顔を引き裂こうとすれすれまで迫ってくる。
頬を風がかすめた。

目の前から一瞬でボールバットが消える。勢いよく後方へと吹っ飛んでいった。ボールバットの身体の中央に矢が刺さっていた。アーチェリーの矢だ！
「ドロシーさん、早く！」
「わ！　わわわ！　はいぃ！」
——怖かった怖かった怖かったあ！
「さすがに今回はダメかと思ったですよぅ！」
わき目も振らずに出口へと走った。弓を構えたモニカと合流し、そのまま中庭へ出る。
ボールバットは追ってこなかった。
モニカの矢で倒されたのか。深手を負って諦めたのか。それとも、月光の下に出てくることができなかったのか。
どれであるにせよ、どれでもよかった。戻って確かめてみる気にはなれない。
今は無事に脱出できたことを喜ぶときだ。
パープルとアリスによって抱えられていたコウリボアと目が合う。くりくりとした黒目に不思議そうな表情を浮かべてドロシーを見ている。
「あなたは、人間を襲っちゃだめですよー」
言い聞かせてわかってもらえるものかはわからなかったが、格闘家と友情を結んだ魔獣もいたことだし、試してみてもいいだろう。

柵の壊れたところから外へと出た。
森の中を四人と一頭でしばらく歩く。
学園からあまり離れると魔獣が出るからと適当なところで止まった。
モニカが、抱きかかえていたコウリボアをそっと地面に下ろした。
瓜坊やはとまどった表情を浮かべ、モニカを見返している。
「ほら」
声をかけるのだが動かない。
「行きなってば！」
動かない。
だが、そのとき街道の脇の茂みががさがさと音を立てて鳴った。
大きな巨体が現れる。
コウリボアをそのまま何倍にもしたような。けれど、特徴的な縦縞はなくなっていて、茶色の毛皮で覆われていた魔獣だった。
ウリボアだ。
くるり、とそのとき初めてコウリボアが背を向けた。たったったと、小さな足を動かして、大きなウリボアの元へと駆けてゆく。
そのときになってドロシーは思い出した。

そういえば、学園に来る途中で自分はウリボアを見ている。こちらには目もくれずに山を走っていったっけ。同じウリボアかどうかはわからないが、ひょっとして、ドロシーたちに目もくれずに走り回っていたその理由は……。
コウリボアが大きなウリボアのところまで辿りついた。
ふんふんと鼻で匂いを嗅いでから、小さな身体を押しつけている。凶暴さで知られる魔獣が、そのときだけは小さな子のなすがままになっていた。
それから背中を向けるとドロシーたちから離れていった。
コウリボアもたったたと後を追う。
一度だけ立ち止まって振り返った。
「ちび……」
と、小さくモニカがつぶやいた。
目の端に光るものが見え、ドロシーは慌てて視線を逸らした。見てはいけない気がしたのだ。
大きな一頭と小さな一頭は街道を途中で離れると、山のほうに向かって去っていった。
風が一度だけ強く吹いて、森の葉がざわりと鳴った。
それでぜんぶ終わり。
蒼い月だけが街道の砂利を白々と輝かせていた。

†

「とまあ、そういうわけで三日ほど帰るのが遅れてしまったわけです」
「ま、言い訳として聞いておいてやる」
ナイアルが言った。
「これも仕方ないことなのですー。ほら、浮世の義理っていうか。年上としての責務というかですねぇ」
「俺にはな――」
ナイアルが冷め切ったコーヒーに口をつけながら言った。
「話を聞いていて、おまえがしっかり者に見えるってのが納得できん」
「ひ、ひどいことを！　あんまりですよぅ！　ルーアンのホテルで待ち続けて、ナイアル先輩はきっと精神がささくれだってしまったんです」
そう言ったら、ぎろっと睨まれた。
先輩の机の上には、原稿が山となって積まれている。あれだけの量を自分が学園に行っている間に書いたのだろうか。いつもの三倍くらいはありそう。
――もしかして、自分がいないほうが原稿が進んでる？
恐ろしい考えに思い至ってしまって、ドロシーは慌てて首を振った。

「で？」
　ナイアルが言った。
「で、とは？」
「そのあと、どうしたんだよ」
「あー、いちおう翌日に四人で学園長さんにぜんぶ報告しました」
　実際には帰ってすぐにドロシーは学園長室を訪れている。帰りが遅くなったときの万が一を考えて相談してあったからだ。ただ、夜も遅かったから、全員が無事だったこともあって、詳しくは翌日と言って寮に戻った。
　旧校舎の柵の壊れた箇所は修理されることになったし、遊撃士を呼んで、魔獣の残りを駆除してもらう手配もされることになった。
　ただ、拾ったのがウリボアの子どもだということは黙っていた。魔獣を拾ったなんて知ったら卒倒してしまう。野生の猫だったということにした。
　事情を知った学園長は理解を示してくれたものの、危険なことに首を突っ込んだからと、三人娘に三日間の補習を課した。まあ、それくらいで済んで幸いだ。
　三人娘を返してからドロシーにもお説教がきた。まったくあなたは大人でしょう。子どもと一緒になってうんぬん、と。それも仕方ない。甘んじて受けてきた。最後に、でもあの子たちの面倒をよく見てくれましたと礼を言われ、やっぱり良い人だと思うドロシーである。

「で、これが矢で吹き飛ばされる直前のボールバットの写真でして」
　至近距離からのフラッシュで色が飛んでしまって出来はあまりよくないのだが。
「おまえ……ちゃんと撮ってたのかよ」
「はい。ほら、ちゃんと瞳にハイライトが入ってるでしょ。明りは大事なんです」
「モンスターが生き生き取れても意味ねーだろ！　てか、俺の写真はこの魔獣以下だって言いたいのか、おまえは！」
「まあ」
「おいこら」
「冗談ですってばぁ。やだなあ。センパイ」
　おまえが言うと冗談に思えないんだよ、とナイアルが言った。
「まあまあ、気を取り直してください。で、こっちがコウリボアを帰す直前の記念写真です」
　森の中。コウリボアを抱えているモニカの写真。
　モニカの両脇にはパープルとアリスがいる。
「どーすんだよ、これ。教師たちには見せられねーんだろ」
「だから、こっそり送ってあげようと思ってるんですよぅ」
　三人ともが笑顔だ。
　フラッシュに光る瞳にはハイライト。



たぶん、一生忘れない。
しばらく写真を眺めていたナイアルだったが、指ではじいてドロシーに返した。
「ま、いいんじゃねーか。よく撮れてるし」
「ありがとうございます」
「誉めてねえ」
「今、誉めたじゃないですか」
「聞き間違いだ」
まあ、こういう先輩だとドロシーは知っている。
「何笑ってんだよ。しかし……ポルターガイストの正体が拾った魔獣の子だったとはな。面白いが、新聞ダネにはならねーなあ」
ナイアルが言ったので、ドロシーはすかさず訂正した。
「そうでもないです」
「は？」
「実はですね。ひとつだけおかしなところが残ってるんですよ」
「おかしなところ？　さて、聞いてたかぎりじゃ、わからなかったけどな」
ナイアルが首を傾げる。
「気づきませんでしたか？　アリスさんが言っていたじゃないですか。物音を聞いた子が寮に

はけっこういるって」
「ああ。そういや言ってたな」
「でも、コウリボアがいたのはアリスさんたちの部屋の中だけ。そこでの物音なんて、そんな遠くまで響くでしょうか?」
「え? おい待て」
「寮の反対側に部屋がある生徒からもわたし聞いたんですよね。確かに家具が鳴る音がしたって」
ごくり、とナイアルが唾を呑んだ。
「おいまさか」
「まあ……。怖がるだろうから、彼女たちにはこのことを明かせないんですけどね」
「お、俺が怖がるのはいいのかよ!」
もちろん、とドロシーはにっこりとほほ笑んだ。
ナイアル先輩だから言えるのだ。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.104

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/